

「よみがえれ江戸遺跡―都市遺構の保存と活用に向けて―」記録

日時 二〇〇四年二月四日(土) 一三:〇〇～一七:三〇

会場 東京都江戸東京博物館会議室

企画趣旨……………2

開会挨拶……………小澤 弘……………3

基調報告 (1) 「都市における遺構の保存と活用」……………谷川 章雄……………4

(2) 「都市遺構の積極的活用に向けて・アメリカ・カナダ・ノルウェーの事例から」……………波多野 純……………10

事例報告 (1) 「江戸城関連遺構の保存と活用」……………後藤 宏樹……………16

(2) 「汐留遺跡」……………佐藤 攻……………19

(3) 「大阪における遺跡の保存と活用・難波宮跡・大坂城跡・住友銅吹所跡など」……………松尾 信裕……………22

(4) 「ホテルJALシティ長崎ほか」……………扇浦 正義……………25

ディスカッション……………(司会) 小林 克……………28

主催 財団法人東京都歴史文化財団／東京都江戸東京博物館／財団法人住宅総合研究財団

後援 江戸遺跡研究会

企画趣旨

近年盛んに調査されている江戸遺跡からは、都市江戸東京の歴史を示す、貴重な遺構・遺物が多数発掘されている。こうした遺構・遺物は、発掘された後は保管されているが、十分に公開・利用されているとはいえない。都市の歴史を具体的に示すモニメントである遺構・遺物を現代の都市づくりの中に取り込んでいくことは、都市考古学の大きな課題である。それには建築や都市工学の分野との連携も不可欠である。

今後の都市東京の施設や建物の中に、出土した遺構・遺物をいかに取り込んでいくのか、その方法、考え方などの現状を踏まえて議論し、これからの文化都市東京づくりに役立てていく。

開会挨拶

よみがえれ江戸遺跡

―都市遺構の保存と活用に向けて―

小澤 弘



江戸東京博物館へおいでくださいましてありがとうございます。江戸東京博物館都市歴史研究室長の小澤です。私は江戸東京フォーラムの委員と、共催の当館のスタッフであるということと、ここでご挨拶することになりました。そこで開催趣旨と、江戸東京フォーラムのことについてお話を申し上げます。

今回のテーマは、「よみがえれ」ということで江戸遺跡を積極的に活用しようという目的があります。今回の江戸東京フォーラムは、特に拡大フォーラムとして、広く多くの方を対象に年に数回行う企画のものです。江戸東京フォーラムは、財団法人住宅総合研究財団の研究助成事業の一つでもあり、今から一八年前に開始されました。このフォーラムは、当江戸東京博物館の設立に尽力されました小

新造先生を中心に、多彩な委員によって企画運営されており、今回で一六五回目を数えます。今回の拡大江戸東京フォーラムは、波多野純委員と、当館学芸員の小林克がプランニングしました。

江戸東京フォーラムの目的は、東京を再考するということで、さまざまな角度、さまざまな分野から、総合的にあるいは多角的に見ていこうということであり、記憶としての都市や地域研究を掘り下げるという意味で、多面的な研究活動、学際的な活動も含め、さまざまな分野の方々が参加しておられます。

本日は「江戸遺跡をよみがえらせる」という趣旨でフォーラムを行います。基調講演を二題予定しております。最初に早稲田大学の谷川章雄教授に「都市における遺構の保存と活用」ということでお話いただきます。都市における遺構・遺跡というものは、従来は「保存」と「開発」という問題が、どちらかという対立概念にありました。近年は、積極的に遺跡を「活用」していこうという方向になってきましたので、そういうご趣旨の発言も含まれるのかと思います。それから、波多野純日本工業大学教授からは、「都市遺構の積極的活用」の外国の事例をいくつか挙げて話をしていただきます。その後、事例報告として、千代田区四

番町歴史民俗資料館学芸員の後藤宏樹さんから、いま話題になっている江戸城関連の遺構の保存と活用について。東京都埋蔵文化財センター前調査研究部長の佐藤攻さんからは、いま開発されている汐留遺跡をどうするかという実際的な問題が提示されると思います。大阪市文化財協会の松尾信裕さんからは、大阪の難波宮史跡等を積極的に活用している事例の報告、長崎県都市再整備推進課学芸員の扇浦正義さんからは、長崎JALシティホテルで遺跡をどのように積極的に活用したかの事例報告、この四人の方の報告の後、小林克さんを中心としてパネルディスカッションに移ります。

江戸東京フォーラムは、すでに今回に関連する「遺跡から江戸の生活文化を探る」(第一四五回)も行っています。本日は、住宅総合研究財団、江戸東京博物館の主催、そして江戸遺跡研究会の後援をいただき、沢山の方々にご参集いただいております。遺跡の保存と活用について活発な議論をしていただきたいと思います。

小澤 弘/おさわ・ひろむ。東京都江戸東京博物館都市歴史研究室長・教授。一九四七年長野県生まれ。明治大学大学院文学研究科史学専攻博士課程修了。調布学園女子短期大学。著書に『都市図の系譜と江戸女子』、『図説上杉本洛中洛外屏風を見る』(共編著)、『ビジュアル・ワイド江戸時代館』(共編著)、『江戸のかたち』(共著)などがある。

基調報告(1)

都市における遺構の保存と活用

谷川 章雄



■江戸遺跡の現状

早稲田大学の谷川です。「都市における遺構の保存と活用」ということで、基調報告でもありますので、大ざっぱな話をしてお発点になればと思っております。最初に、江戸遺跡の残存状況がどのぐらいかという話をしたいと思います。遺構の保存の問題は、遺跡の現状と関わっているからです。

昭和六三年(一九八八年)に出された東京都教育委員会の「江戸遺跡取り扱い検討会報告」では、江戸遺跡の約五〇%が残存していると指摘されています。その四年後に、新宿歴史博物館の富樫雅彦さんが、「都心部における文化財の保護と活用について」(『新宿歴史博物館紀要』創刊号)という論文の中で、年間約二%が壊れていくと推定しました。この約二%の中には、もちろん調査後に開発に

よって破壊された遺跡も含まれています。仮にこれを前提に考えると、平成一六年(二〇〇四年)の段階では、江戸遺跡の残存率は二割を切っていることになりました。

ただし、これは富樫さんの推定を前提にしていますので、現状で江戸遺跡がどのくらい残存していて、毎年どのくらいが壊れていくのかを正確に把握する必要があります。だいたい以前からこのことを言い続けているのですが、正確な数字がなかなか出てきていません。

また、たとえば、都心の千代田区や新宿区と少し離れた文京区では、遺跡の残存状況が違うことが考えられます。

現段階で江戸遺跡の残存率が二割以下で年間約二%が壊れていくと、あと一〇年経たずに江戸遺跡はなくなります。本当にそうなのか。そうだとすると、今後一〇年間我々はどういう調査を行なっていくのだろうか、あるいはどのよう遺跡の保存の問題を考えていったらいいのかという方針を早急に立てる必要があります。

現状の把握と今後見通しに基づく戦略を考える必要があり、その一つに遺構の保存と活用の問題が位置づけられると思います。

一方、都市考古学には様々な困難な状

況があります。田中琢さんは昭和四八年(一九七三年)に、おそらく平城京が念頭にあつたと思われませんが、都市考古学の対象である遺跡の範囲が広くて深いこと。遺跡の上に現在の都市生活が営まれていくことが、考古学の調査や記録を極めて困難なものにする述べています(『遺跡の保護(1)』『考古学研究』七六)。

これは江戸遺跡の場合も同じで、原始・古代の集落遺跡などに比べて、遺跡が巨大で広く、重層性があつて深い。そして、江戸遺跡の上に現在の大都市東京が営まれていくため、農村で畑になつていく遺跡を発掘するのは違います。

東京は土地の値段が高く、開発計画が既に決まっている状況で、それを白紙にすることはほとんど不可能に近い。したがって、通常我々が江戸遺跡を発掘調査した場合、記録保存すなわち発掘した後には破壊される遺構を一部であつても保存するのは非常に難しい。発掘終了後には遺物は取り上げるが、遺構のほとんどはその場に残され、開発工事によって破壊されるのは普通のことです。

先ほど申し上げましたように、現状では江戸遺跡は刻々と壊されていく状況にあるながら、その中で遺構の保存を考えるのは、かなり難しいのだということここでは指摘しておきます。

■現地に保存された遺構の事例

ただ、それで手をこまねいていいのかというと、決してそうではなくて、これまでも何とか残したいという関係者の努力によって、保存された遺構があります。

現地に保存された遺構事例の代表的なものとして、江戸城関連の遺構があげられます。詳しくは後藤さんの報告に譲りますが、江戸城の一部は国の特別史跡、江戸城外堀跡は国の史跡に指定されており、文化財保護法によって保護され、現状変更は厳しく規制されています。つまり、江戸城関連の遺構の場合には、法律的な裏付けによって遺構が現地に保存されているわけです。

また、港区汐留遺跡の新橋停車場のプラットホーム及び駅舎の遺構も現地に保存され、目にすることができるわけですが、これも国の史跡です。この事例は、佐藤さんの報告の中で詳しく紹介されると思います。

■移築して保存された遺構の事例

二番目に、移築して保存された遺構の事例をあげます。私知っているものは、神田上水の石垣樋と、松平摂津守上屋敷の下水の暗渠があります。

文京区の水道橋の外堀の土手から、約

八〇mの神田上水の石垣樋が発掘されました。これだけの長さの上水の石垣樋を発掘した事例は、それまでありませんでした。しかしながら、遺構をそのまま現地に残すことはできないので、移築する方向で検討することになりました。

そして、東京都教育委員会をはじめとする関係者の努力によって、家康入府直後に神田上水ができたということを前提にした「江戸上水・東京水道四〇〇周年記念事業」のなかで、平成二年（一九九〇年）に、水道歴史館の移転先の隣の文京区立本郷給水所公苑に移築されました。石垣樋は、江戸時代と同様に空積みで復元しています。ただし、写真1のように入口の部分は、新しい石積みで遺構を保護しています。上部は写真2のように

蓋石が見える状態で、その先は蓋石をはずして側面の石積みが見られるような形になっています（写真3）。さらにその先は、カーブして外堀を渡る懸樋につながる部分になります（写真4）。同じように、出口の所は新しい石積みで補強してあります。

これだけの長さの神田上水の石垣樋は、調査が行われた一九八〇年代の終わり以降発掘されていませんので、この遺構はほんとうに残してよかったです。この遺構はもう、二度と見るチャンスがないかもしれません。

つまり、遺構の保存の問題は、今後発掘される可能性があるかどうかということを含めて、考えていかなければいけないと思います。

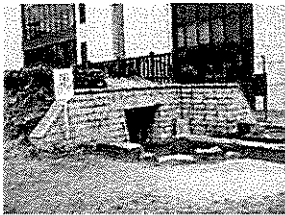


写真1



写真2



写真3

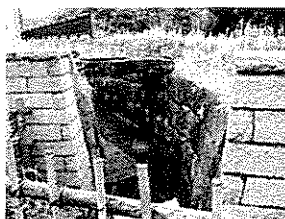


写真4

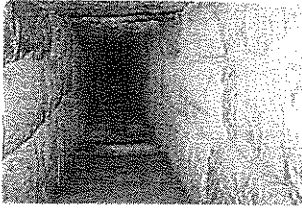


写真 5

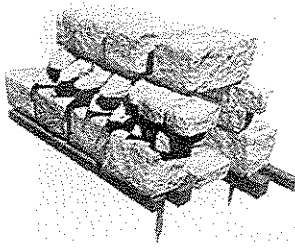


写真 6

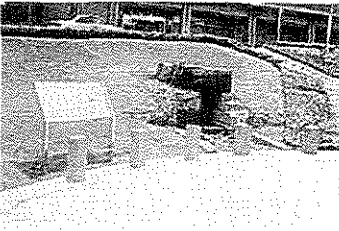


写真 7

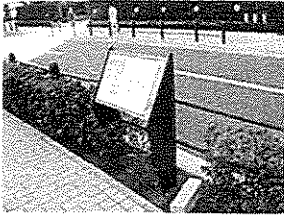


写真 8

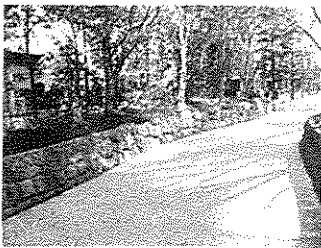


写真 9

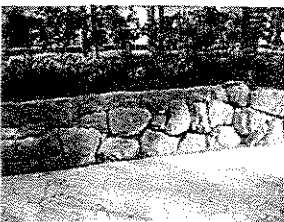


写真 10

写真5は、新宿区の「津の守坂」の地名の起源である、松平撰津守上屋敷の下水の暗渠です。興味深いことに、この暗渠は、現在の下水道に接続されて使用されていました。ちょうどこの場所にマンホールを造ることにになり、下水道局が下水道の中をロボットカメラで確認したところ、石積みが発見されて発掘調査をすることにになりました。

このとき、下水道局の方たちは、近代下水道の前身が発見されたということで非常に関心を示し、遺構のCG(写真6)を作成して、写真7のように、遺構を落合下水処理場に移築して保存していただきました。開発する側の関心の高さによって、遺構の保存ができたわけです。

この下水の暗渠は構造的に非常に特殊な構造で、私は他で見たことがありません。こうした遺構を、現在も我々が目にするのができるのは大変ありがたいことだと思っています。

■遺構の一部が転用された事例

三番目に、遺構の一部が転用された事例として、千代田区飯田町遺跡をあげます。飯田町遺跡は発掘調査後に再開発が行われ、今はビルが立ち並んでいます。が、遊歩道には、発掘された高松藩松平家上屋敷の庭園などの遺構の説明板があり(写真8)、この場所が江戸時代には大名屋敷だったことがわかります。また、発掘された平川の護岸の石を歩

道の石積みに転用しています(写真9)。この歩道は「平川の径」という名前で、新しい石積みの中に一部古い遺構の石をまとめて積んでいる箇所が見られます(写真10)。その脇に「平川の径」の古い石の由来が彫り付けてあります。

このように、やや地味な事例に思われるかもしれませんが、関係者の方々の努力の賜物であって、こうしたことの積み重ねが極めて大切であると思います。

■関連する展示施設が設置された事例

最後に、関連する展示施設が設置された事例をあげます。ひとつは東京メトロ南北線の市ヶ谷駅構内の「江戸歴史散歩コーナー」です。南北線の建設工事で駅

舎及び換気口部分が国の史跡江戸城外堀跡に当たっていたため、史跡部分の発掘調査を行い、その成果を含めた展示コーナーをつくることになったわけです。そこには東京都教育委員会の大きな努力と東京メトロのご理解があり、また展示計画は土木学会に委託されました。

写真11は、新谷洋二先生のご指導による江戸城の石垣の展示です。裏込の状態がわかるようになっており、矢穴は下向きに積むとか、石に刻印があったりして、石垣を説明するときの教科書としては最適のものです。

なお、この石垣は床面加重の制限があったので、石の表面をスライスして、裏はアンカーで留めています。



写真 11

展示に用いられた石は、かつて雉子橋から出土したもので、保管してありました。復元や保存、展示の材料はなかなか手に入りません。発掘調査で出土した遺構の構築材は、保管せずに処分することが多いわけですが、そのため、いざというときに入手できないことが往々にしてあります。

また、この展示コーナーには二枚の絵があります。一枚は、石垣に使う石を切り出して船で運び出す工程が描かれている「石曳図」(写真12)です。この絵は個人蔵ですので、実際に見ることは難しい。もう一枚は、名古屋市立博物館にある「築城図屏風」(写真13)です。この実物は博物館の収蔵庫にあります。いざ

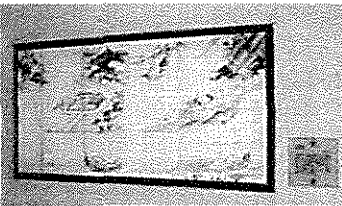


写真 12

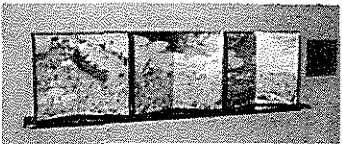


写真 13

れの絵も本に掲載された写真はありますが、これだけ大判のものはない。したがって、絵の内容を細かく見たければ、市ヶ谷駅に行けばいいわけです。

これは専門家にとつてありがたいことで、また一般の人たちも、個人蔵のものや博物館の収蔵庫に入っていて公開されていない絵を見ることができるようです。

このほか、発掘調査の成果(写真14)や写真15のように、床全体には江戸の切絵図があります。

私がこの写真を撮りに行ったときも、駅構内を歩いている人たちが足を止めて展示を見ている姿をよく目にしました。改めてこの展示施設をつくってよかったと思っています。

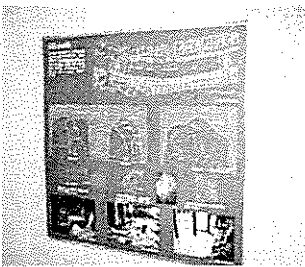


写真 14

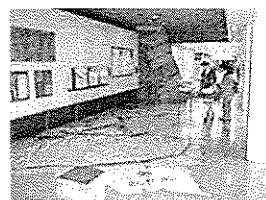


写真 15

国の史跡である小石川後楽園に接する後楽森ビルの敷地内に土蔵風の建物の展示室が設置されています(写真16)。中には「御守殿」などの文字が刻まれた台石が置かれていて、壁面には発掘調査の状況をはじめとするパネルがかかっています(写真17)。

先ほどの市ヶ谷駅の「江戸歴史散歩コーナー」の場合は江戸城外堀跡という国の史跡でしたが、小石川後楽園も国の史跡であるため、このような展示室がつくりやすい条件にあったと思います。

こうした展示は、できるだけわかりやすいものにして、専門家だけでなく、多くの人に見てもらえるような仕掛けをしていかなければならないと思います。管理上の問題とともに大きな課題です。

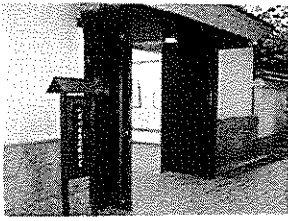


写真 16

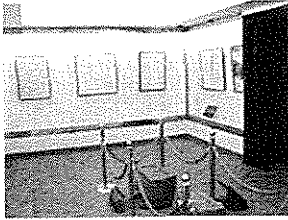


写真 17

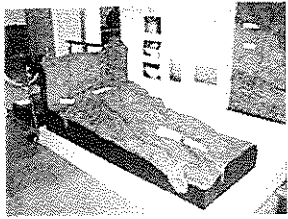


写真 18

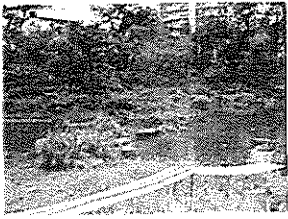


写真 19

■切り取られた地震痕

写真18は遺構ではありませんが、四谷の外堀土手の盛土から発見された、地震でできた地割れです。これを切り取って、新宿歴史博物館に展示しています。江戸東京博物館でも、四谷の外堀の地震痕を展示に使っています。この場合は地震痕ですけれども、切り取りやはぎ取りは、当然遺構にも適用できません。この方法は移築保存や展示室よりも費用がかからないので、もっと実施するべきでしょう。

■遺構保存に関わる問題

六本木ヒルズに「毛利庭園」という庭園があります(写真19)。この庭園をパツクにテレビの天気予報をやったりしていますので、ご存知の方も多いかと思

ます。この場所は、東京都が指定した旧跡「乃木大将誕生地」および「毛利甲斐守邸」にあたっており、江戸時代には長門府中(長府)藩上屋敷でした。乃木稀典はこの侍長屋で生まれたのです。

六本木ヒルズを建てる前には、ここに池がありました。その池は長門府中(長府)藩上屋敷の庭園の池を近代になって半分ぐらい埋めたものです。その後、ウイスキーのニッカの工場になっていたので、ニッカ池と呼ばれていました。

六本木ヒルズの開発にあたっては、この池の上に盛土して遺構を保存し、その上に今の庭園を造りました。そうすると、これを「毛利庭園」という名称で呼んでいいのかという問題が出てきます。

しかもこの大名屋敷を拝領していたのは長門府中(長府)藩の毛利家すなわち分家であって、長州藩の毛利本家ではありません。毛利本家が拝領していた屋敷の庭園は、六本木の防衛庁の隣の今の檜町公園にあたります。一般に「毛利庭園」といえば、毛利元就以来の毛利本家の屋敷の庭園を想起起こすでしょう。ですから、「毛利庭園」という名称で果たしていいのか。遺構の保存にはこうした問題がつきまといってくる場合があります。

従来どのような遺構を保存すべきかについては、その場で判断してきています

が、これからは、将来を見据えた全体的な戦略を持つべきだと思います。

先ほどの移築保存されたような規模の神田上水の石垣樋は、その後発掘されていません。また、玉川上水は、丸の内線の建設などでほとんど潰滅的な状況になっています。

私は、二〇年以上前に、新宿通りの四谷の所で、工事中に玉川上水の石垣樋を見たことがあるのですが、あのときになぜ移築して保存できなかったのか、今になつて後悔しています。今後玉川上水の石垣樋を見ることはできないかもしれない。したがって、これが最後だというような遺構は、是が非でも残していく必要があると思います。

また、保存された遺構を活用する際に商業施設がからむと、多少なりとも色付けされる可能性があります。例えば横浜の赤レンガ倉庫は中に店舗が入っていますが、それで良いのか。全体できちんと議論して詰めていく必要があります。

つまり、都市計画の中に、遺跡や遺構の保存をどのように組み込んでいくかというガイドラインを作る必要がある。

考古学という学問から見れば、保存された遺構は学術的な資料です。また、埋蔵文化財行政の立場からは、文化財の保存と活用・公開という観点が入ってきます。

す。これに加えて、当然都市計画上の問題や商業施設の利用などからむことがあるでしょう。それらをトータルにどのように考えていくのかということが実は何もないので、これを考えていくべきだと思います。

また、「土地の記憶」をいかにつないでいくかという問題があります。消しゴムで過去を消すような形の開発のあり方を反省するべきでしょう。たとえ遺構そのものを保存できなくても、飯田町遺跡のように説明板を立てるなど、やれることを積み重ねていくことが大切です。

先ほど紹介した事例でも、神田上水の遺構の保存を水道局が行い、下水道局が下水の暗渠に大きな関心を示したように、開発する側は古いものは何でも潰してしまふような発想だけでは必ずしもないことを、我々は認識すべきでしょう。

また、墨田区の横川一丁目遺跡という旗本の抱屋敷の発掘調査をしたときに、日本の近代ゴム工業の発祥ともいえるべき明治時代の三田土ゴムというゴム工場の遺構が確認されました。

墨田区にとつては、こうした近代産業の歴史は非常に重要なので、最低限の調査をやりました。報告書を作成しているときに、三田土ゴムに勤めていた方たちが、「三田土会」という会をつくっている

ことがわかり、いろいろな話をうかがうことができました。そして、「三田土会」の方たちは、横川一丁目遺跡の場所に三田土ゴムがかつてあったことを示す説明板を立てるためのお金を区に寄付し、それで今説明板が立っています。

このことは、直接開発する側ではありませんが、そこに住んでいた人たちが抱えている「土地の記憶」をつなこうとする意識を我々が汲み上げていく努力が必要であることを物語っています。

このように遺構の保存をめぐる問題は、なかなか難しいのですが、地道な積み重ねと将来を見据えた戦略をもって、道を切り拓いていくべきだと考えております。以上で私の基調報告を終わります。

谷川 章雄／たにがわ・あきお。早稲田大学人間科学部教授。一九五三年東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科史学（考古学）専攻博士課程満期退学。論文に「近世墓標の変遷と家意識」『史観』一一一、江戸の墓地の発掘』『経る江戸』、『考古学からみた近世都市江戸』、『史潮』新三二、江戸の相撲と玩具』、『相撲の宇宙論』、『江戸の生活史と考古学』、『民衆史研究』五七、江戸の胎衣納めと乳幼児の葬法』、『母性と父性の人間科学』、『江戸の火葬墓』、『歴史と建築のあいだ』などがある。

遺跡の発掘調査を通して、江戸の都市史および都市空間について考えている。

基調報告 (2)

都市遺構の積極的活用に向けて

—アメリカ・カナダ—

ノルウエーの事例から—

波多野 純



■考古学への期待

私は、建築の歴史や復原設計が専門で、考古学の専門家ではありません。ただ、考古学はとても楽しく、あちこちの発掘現場へお邪魔をしております。

考古学の発掘調査というのは、ある意味では遺構の破壊です。近代の遺構を壊さなければ、その下の近世の遺構にたどり着けない。しかも、現代の都市遺構というのは、発掘調査を始める前から破壊が決まっています。調査が終わったら、壊してビルを建てるのが一般的です。遺構は破壊されてしまうと、他の人が別の見方・解釈をしたくても、そのチャンスは失われてしまいます。第一四五回の江戸東京フォーラム「遺跡から江戸の生活文化を探る」でも、私はこのことを問題

にしました。特に発掘調査報告書が定型化されることによって、発掘した人たちの生の感覚、臨場感が記録されなくなることを危惧しています。現場でしか得られない体験を、見解を、記録して欲しいとお願いました。

今回は、世界各地の事例から、積極的な遺構保存の可能性を、提案したいと思っています。

■シアトルの

アンダーグラウンド・ツアー

シアトルは、アメリカ人が住みたい町の第一位だそうです。この町に、パイオニア・スクウェアという、ダウンタウンの広場があります。ここに、パイオニア・ビルディングとあり、さらに左に、アンダーグラウンド・ツアーと書いてあります(写真1)。地下室、ベースメントではなくて、まさにアンダーグラウンド、モグラのように地下へ潜っていくツアーです。一回二〇〇人ぐらい、それが一日に五、六回行われていますから、一日に千人、年間三六万人。ちよつとした博物館の入館者を軽く超えています。

二〇〇三分の解説の後、町の中を潜っていきます。シアトルの町は、一八五〇年ごろに木材の集散地として、開拓されました。まず、積出港に近い低地に町

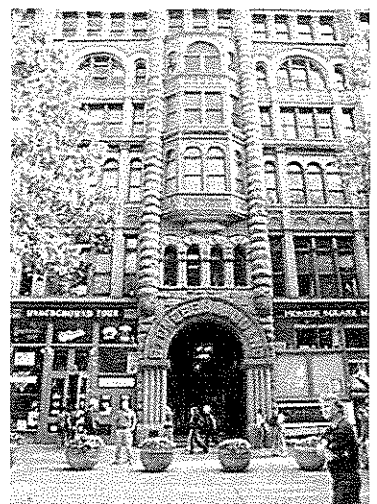


写真1

が造られました。その後、一八八一年に水洗便所が登場しますが、満潮時の水位よりも低いレベルに下水道を造ってしまったため、満潮時には、汚物が道路にあふれ出す、とても不潔な町だったそうです(写真2上)。一八八九年に大火がありました。その後、復興景気が起きて、ビルがどんどん建ってしまいました。ビルは建ちましたが、下水道はそのままですから、道路に汚物があふれる状態は続いていました。そこで、市当局は仕方なく、道路の車道部分だけかさ上げし、そこに下水管を埋めました。この結果、車道からは渡り廊下でビルの二階へ入れますが、そうでない場合は、どこかで階段を下りて歩道からビルの一階へ入るといふ、変則的な町になってしまいました。当然、車道から歩道へ転落する人がでて、一年間に一七人が死んだそうです(写真2下)。

そこで仕方なく、歩道の上に蓋をして、すべて二階から建物に出入りするようになりました。結果として、もともとの一階をみんなが忘れ、捨ててしまいました。この忘れてしまった一階が、観光資源になるのではないかと、一九六五年にある新聞記者が気付いき、アンダーグラウンド・ツアーを始めました。

現在の写真と、歩道に蓋がされた頃の写真を並べておきました(写真3)。坂道の途中、中途半端な高さに窓があるのが

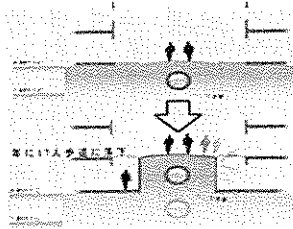


写真2

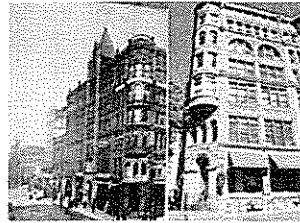


写真3

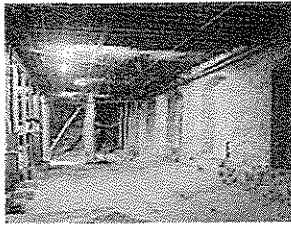


写真4



写真5

お分かりいただけると思います。

解説が終わると、五〇人ぐらいずつまとめて、ツアーに出かけます。ビル脇の階段を降り、昔の歩道に出ます。写真4の右側は昔の車道で、車道に擁壁を造り、中へ下水管を埋めた部分です。現代の歩道は、鉄骨の梁やRCのスラブで補強してあります。交差点の角辺りの上の歩道部分には、ガラスブロックが入っていて、明かりが取れるようになっています(写真5左)。一〇〇年前のガラスブロックということになります。中には、昔のキャバレーが残っていたり、バーのカウンターが残っていたり(写真5右)、単純にこれだけのことなのですが、これで三六万人の人が集まるとしたら大変なことです。最後に、アンティークショップで土産物を買えます。当時の便器のレプリカなど、ふざけたものがたくさんあってそれなりに楽しいです。

■モンリオール歴史博物館の遺構体験空間

つぎに、カナダのモンリオールです。この町に、面白い博物館があります。現代建築の立派な博物館が交差点に面して建ち(写真6左)、交差点の下が、モンリオール発祥の地とされる壮大な遺構です。交差点の反対側には、旧税関の建物

が遺っています(写真6右)。博物館と地下遺構と、向かい側の旧税関の建物がセットとなって、ひとつの博物館なのです。

まず、入場券を買います。入場券を買うときに難しいことを聞かれます。英語とフランス語とどっちがわかると聞かれて、日本語と言いたかったのですが…。モンリオールはケベック州ですからフランス語の町なのです。しばらくすると、ホールで3Dの映像が始まります。昔、税関に勤めていたお爺さんが、モンリオールの歴史を話してくれます。それが一五分ぐらいあって、その後地下へ潜っていきます。上は交差点の道路ですが、ちゃんと補強がしてあって、遺構が見学できます(写真7左)。床には、遺構と同時代の町並みの模型がはめ込んであります。遺構を破壊しないように渡り廊下を渡りながら、まさに遺構の見学会のような雰囲気でありながら、常設展示として遺構が全部見られるようになっていきます。



写真6



写真7

下水道遺構は、向こうのほうへ下水が流れていくような雰囲気をつくってくれています(写真7右)。遺構を見終わると、旧税関の建物の地下へ出ます。税関の建物の内部は改修されていて、ミュージアムショップになっています。

■バイキング船発掘と

ノルウェー人のアイデンティティ
つぎは、ノルウェーです。私は、一九七八年からネパールで歴史的建築の調査や修復の仕事をしています。そこで友達になったのが、ノルウェー工科大学のピオネスさんという、私と同じような仕事をしている先生です。彼に招かれて、何回かノルウェーへ行きました。

オスロには、発掘されたバイキング船が保存してある博物館があります。ピオネスさんの説明によると、バイキング船の発掘によって、はじめてノルウェー人というアイデンティティが確認できたのだそうです。スカンジナビア半島ではスウェーデンがすごく強くて、ノルウェーは属国あつかいを受けてきたそうです。それが、バイキング船の発掘のおかげで、元気を獲得したのだそうです。

■野外博物館の魅力

オスロから北へ列車で数時間のところ



写真8

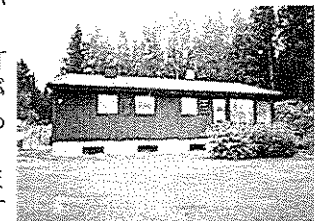


写真9

に、リレハンメルという町があります。一九九四年に、リレハンメル・オリンピックが開かれました。お金のかかっていない、健全なオリンピックとして、高い評価を得たオリンピックです。

この町に、マイホウゲンという野外博物館があります。この大きな特徴は、徹底した生活再現にあります。例えば、パン屋ではちゃんとパンを焼いています。農家を移築する場合には、主屋ばかりでなく納屋など様々な付属屋の全てを移築します。(写真8左)。屋根には土を載せ、草を生やします。草が根を張り、雨で土が流れるのを防止します。

建物の中では、昔の格好をしたお婆ちゃんやんが待っていてくれます(写真8右)。もちろん博物館職員なのですが、ちゃんと昔の仕事をしています。

この野外博物館はとても大きな規模で、中が農村ゾーンと商業ゾーン、さらに近現代ゾーンに分かれています。近現代ゾ

ーンにはびっくりしました。一九七〇年の住宅が移築されているのです(写真9)。私は一九七〇年に大学を卒業したので、その年の住宅が博物館入りしたというのは、すごいショックでした。デザインは、まさにあの時代です。私たちもやっていたデザインです。正方形の窓など、すごく懐かしい気がしました。

■遺構を保存と現代建築の両立

これからが本日のいちばんの売り物です。リレハンメルの南にハマルという町があります。オリンピックのときに、フイギューアスケートが行われた町です。この町の郊外に、ヘッドマルク野外博物館があります。ものすごく広い敷地で、これからお話しする遺構を再生させた建物の他に、農家ゾーン、さらに鉄道関連の博物館があります。鉄道関連の博物館には、五〇〇m以上あるでしょうか、レールが敷いてあり、駅などの施設も整っています。

本日お話をしたいのは写真10です。もともと一三世紀ぐらいの、ハマル司教の要塞がありました。その要塞の周りに、一八世紀ごろに納屋の建物が建てられました。スヴェレ・フェーンという、ノルウェーで最も有名な建築家が、この遺構を再生させました。壁の一部が遺るだけ

の、完全に破壊された遺構でした。コの字型に一八世紀の納屋が囲んでいて、その中庭にハマル司教の一三世紀の遺構があります。

保存再生にあたっては、遺構には傷付けないのだという態度を、デザインとして表現しようとしています。遺構の穴の開いた部分に、一枚のガラス板をそっと止め、そこにドアを取り付けています(写真10右)。遺構を壊し、サッシユをはめるようなことはしないのだということを、デザインで示しています。写真11は中での納屋の壁です。これに対して、壁や床を傷つけず、コンクリートの箱と、木造の屋根を架けることによって、博物館として成立させています。丁寧に見ると、遺構の一部は破壊されているように思われますが、遺構を破壊しないコンセプトは伝わってきます。展示ルートのコンセプト部分の足が、床に下りています。

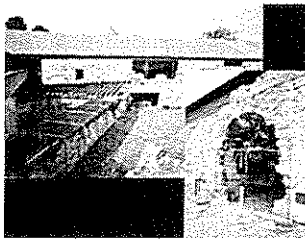


写真 10



写真 11

床部分の遺構も一応全部見えるようになっていて、本場に遺構のない所だけに柱が立っているかというところ、それは疑問だと感じましたが、それでもとてもきれいでした。これは、ちゃんとした博物館として機能しています。現代建築として見ても、良いデザインだと思えます。二〇〇四年一二月から、この建物を設計したスヴェレ・フェーンの展覧会が、東京芸大で開催されます。期待しています。隣に教会の遺構があります。別の建築家により、教会の遺構に傷を付けず、ガラスで覆って保存しています(写真12)。宗教空間として見事に成り立っていると、思います。つまり、下手な復元よりは、こういうカバーを掛けるだけで、ここに蝋燭が二本立っている祭壇が見えますが、立派に教会になっているという格好よさです。これを日本でやったら暑くて暮らせないし、空調費がかかりすぎます。でも、とても素敵な印象を持ちました。無

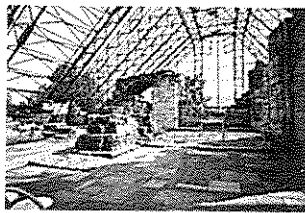


写真 12



写真 13

■世界遺産ベルゲン

つぎは、世界遺産として有名なベルゲンの町です。ベルゲンのプリンゲン地区は、まさにハンザ同盟の港町です。オスロが発展するまでは、ここがノルウェー最大の都市でした。港町の中、船員が泊る宿舎の内部です。カプセルホテルの夕コ部屋です(写真13)。写真14上は、古い木造倉庫群です。いつの建築だと聞くと、みんな困った顔をするのです。つまり、何回も火事に遭っていて、実はあまり古くないけれども、昔のまま再建したと言うことなのでしょう。

写真15は、とても魅力的な空間です。妻入の木造倉庫の間に、ちよつとした隙間・路次があります。夏の写真と冬の写真が並べてありますが、路次は板で舗装



写真 14



写真 15

されています。雪の時、板だと滑らないと、説明されました。建物の上から飛び出しているのは、滑車です。荷物を、上階の倉庫に入れるためです。

ベルゲン市の文化財担当者に、話をうかがいました。奥行き深い路次の一部に、空地が取られています(写真14下)。

こんな所が火事になったらたまったものではないというので、延焼防止帯を造る目的で、政策的に建物の一部を取り壊したそうです。そのときの判断としては間違っていないかったのだけれども、今となつてはひどいことをしましたと、反省しておられました。やはり、火事が怖かったのでしょうかね。

この地区にあるプリンゲン・ミュージアムでは、建物の内部に遺構がそのまま保存され、それが外部まで連続して見えず。外の遺構と中の遺構を、連続して見ることができ、博物館展示のユニークな手法です。

■技術伝承の重要性―ネパール―

最後に、ネパールの話をさせていただきます。私は、二五年間ネパールで仕事をしていました。ここでは、ものとしての遺構保存ではなく、技術伝承の問題をとりあげたいと思います。ネパールの仕事では、ODAのように大金を持って行

って、日本のゼネコンが行つてという仕事のやり方ではなく、現地の職人と一緒にやることで、昔この国の人々が造った質の良い建築の技術を、再生させようと考えました。

写真16は、一八世紀ぐらいの住宅です。煉瓦の壁がはらみ、亀裂が入っています。道路も煉瓦で舗装されています。煉瓦で舗装された道路を車が走ると、建物まで震動が伝わり、壁が外側にはらんでしまっています。ネパール建築が共通に持っている欠点です。

ネパールでずっと調査・研究を続け、イ・バハ・バヒという仏教僧院の保存修理を、一九九〇年から六年ほどかけて最後にやりました。なぜこの修理をやったかというところ、建物を保存するだけではなく、この建物を造った技術を次の世代に伝えたいと考えました。

もう一つ大事なことは、この建物は生きていっていることなのです。イ・バハ・バヒは中庭を囲む形式の建築なのですが、朝の四時か五時ごろ陽が昇り出すと、まづお参りのおばあさんたちがお灯明を持って訪れます。朝の七時か八時になると、お母さんたちが洗濯物を持ってきて、ここだけに水道がありましたので、この水道で洗濯を始めます。やがて、小学校の授業が始まります。午後になると、今

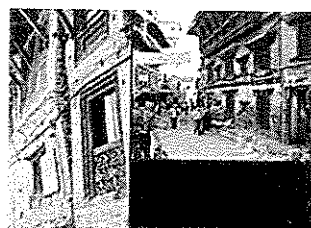


写真 16



写真 17

度は中学校の授業が始まります。四時ごろになると、お父ちゃんたちが帰ってきて、博打を始める、というように一日中生きていく建物なのです。そのための苦勞もありました。一〇日なら一〇日の予定で、やり遂げたい仕事を決めて、ネパールへ出かけます。ところが、この建物を維持しているグッテイといわれる同族的社会集団から「きょう娘が初潮を迎えたから、明日お祝いの宴会をやる。明日は現場を休みにしてくれ」とか言われて困ってしまうのです。本当に生きています。いま訪ねても、建物の前にきれいに花を並べて、とてもよく使ってくれています。ただ、前に立っている電柱は、二〇年前にどけてくれるという約束をしたのに、今でもどいていません。これがネパールという国のやり方です。

修理は、地元の大工さんと私たちが一緒にやります。手斧など、伝統的な道具

を使い、瓦は土で押さえてもらいました（写真17）。煉瓦も足りない分だけ、歴史的なサイズで焼いてもらいました。野焼きです。これはとても大事なことなのですが、今のネパールにはイ・バハ・パヒを建てた時のような技術はありません。解体修理をすることにより、あんなすごい技術が昔はあったんだと実感してもらい、建物だけでなく技術を甦らせようと考えたわけです。

建前の儀式では、山羊を一頭私が買わされまして、その山羊をお寺に連れて行って、目の前で末期の水を飲ませて首を落として生け贄としました。その生け贄にした山羊が、三〇分後にカレーになって出てくるのを、食べなければいけないのです。脇にちゃんと頭が置いてあり、結構しんどいものでした。

■都市遺構を生かした町づくり―台湾―
実は、一昨日、台湾から帰ってきました。台湾の文化財保存は、ここ数年急速な進歩を遂げています。積極的な利活用に関しては、日本の先を歩いています。台湾で文化財保存をやっている人たちと親しくなり、一緒に国際シンポジウムを開いてきました。

新竹という、台北から車で一時間ぐらいの町です。アジアのシリコンバレーと

いわれる最先端の町です。この町には、かつての城堀があります。今も水を湛え、魅力的な都市景観を作っています。この城堀の横に、城門がありました。この城門はちよつといんちきです。下の石垣は本物ですが、上はコンクリートです。

この一帯の道路を整備することになったのですが、城堀とそこに架かっている橋が邪魔になってしまいました。そこで、城堀は暗渠としました。橋の遺構をどうしようかというので、発掘調査をしたところ、数世代の橋の遺構が見つかったそうです。写真18のように、遺構を保存した、すり鉢状の公園が作られています。なかなかおもしろい企画です。

■発掘成果の共有が課題
以上ですが、私が最後に申し上げたいのは、遺構の保存・活用は、遺構破壊の

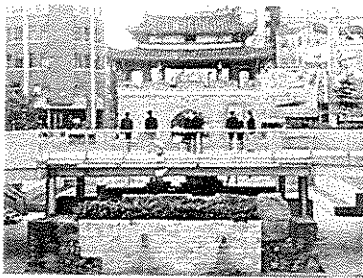


写真 18

エクスキューズ程度の軽い話ではないと言うことです。都市は歴史の上にしか成り立ちません。それを常に認識できる環境を作ることは、今を生きる私たちの責務であると同時に、時空を超えて都市の記憶を共有できる、ものすごく楽しいことなのだと思います。

考古学の発掘現場の発見の魅力を、多くの人に共有して欲しいと思いますし、次の世代へも伝えたいと思います。

波多野 純／はたの・じゅん。日本工業大学工学部建築学科教授。一九四六年神奈川県生まれ。東京工業大学理工学部建築学科卒業。工学博士。著書に「江戸城Ⅱ」（城郭・侍屋敷古図集成）、「復原 江戸の町」(The Buddhist Monasteries of Nepal) (共著)、「都市と共同体」(下) (共著)、「江戸名所図屏風の世界」(共著)、「歴史・文化・景観の保全と再生のあり方報告書」(主査)、「国指定史跡『出島和蘭商館跡』西側五棟建造物復元工事報告書」(編著)がある。

江戸の武家屋敷の都市史的研究、絵画史料による江戸の都市景観の復原的研究、ネパールにおける仏教僧院の研究と保存にたずさわる。長崎出島、佐賀城本丸御殿など遺構を保存し、復原建物を建てる仕事にも取り組む。

事例報告(1)

江戸城関連遺構の保存と活用

後藤 宏樹



「江戸城関連遺構の保存と活用」というテーマで、三つのお話をします。一番目は「江戸城とはどのような遺跡なのか」、二番目は事例を、三番目はこのあとの討論で話ができばと思っています。

結論は、谷川先生の発表にあったように、どのように東京の江戸遺跡を整備、活用していくのかということです。

それには「理念」と「計画」の二つが重要です。様々な遺跡を発掘調査してはいますが、とても重要な遺跡や、そうでもない遺跡も確かにあります。遺跡を文化財として評価をし、地域の歴史とどうかわりをもたせるか、そういう方向性が大事です。

今まで遺跡を個別事例として保存や活用してきましたが、今後は全体計画の中に、位置づける基本方針が重要です。そのために、「技術的な手法」と「体制整

備の手法」を活用します。

前者では、波多野先生がなさっている建築の保存や活用というのを取り入れる必要があるでしょう。例えば、遺跡の発掘も限定的に行い、全体を保存して整備して活かしていく活用もあるとは思いますが、イメージを伝えていく、あるいは遺構を床面に表示していくなど、様々な緩やかな手法も考えながら、遺跡をその場で展示したり、活用したりという技術的な手法なども、きちんと議論をして位置づけていくことも必要です。

後者の「体制整備の手法」は、特に土地の所有者とどのように向き合って、遺跡の発掘調査をして保存、活用していくかということ。外部の人たちの理解と協力を得ていく手法も必要ということ。

この二つの手法と全体計画を、きちんと位置づけていかなければなりません。まず江戸城というのは、どのような遺跡で、これからのような計画で活用ができるのかを考えたいと思います。

四〇〇年前の慶長八年(一六〇三年)に天下普請、江戸に幕府が開かれて、江戸城が整備されていきます。「別本慶長江戸図」と「慶長江戸図」は、慶長期の江戸城普請の前後を表した図です。ここでは、日比谷入江がまだ入江として残って

います。本丸、いま皇居外苑になっている西の丸下、西の丸という大まかな骨格みたいなものは、開幕する以前にできていました。ただ、普請後のような整備された城ではなかったのではないかと思われまます。

慶長十一年(一六〇六年)に第一次天下普請で江戸城が成立していきます。本丸、西の丸、吹上の中に各大名の屋敷があった時代を図は表しています。西の丸下、大名小路という現在も残っている江戸城が成立していたことが分かります。

慶長江戸図に着目しますと、慶長期は土塁を食違い合わせただけで、あまり石垣が使われていないことが分かります。次の時代の元和・寛永期になりますと、石垣で築いた枡形門になります。

江戸城は寛永十三年(一六三六年)に最後の工事が行われて完成しますが、それよりも一段階前の江戸城を指し示している図があります。それは、寛永九年(一六三二年)の「武州豊島郡江戸庄図」です。これを見ますと、大手門はいまの枡形門の城門になっています。また、江戸城の西半分が描かれています。それは寛永一三年には江戸城の総構え、外堀の整備が完全に行われていなかったのではないかということを示しています。

図1は、江戸城の外堀の完成した姿で、

江戸城跡と江戸城
外堀跡（遺構の保存
と活用された地点）

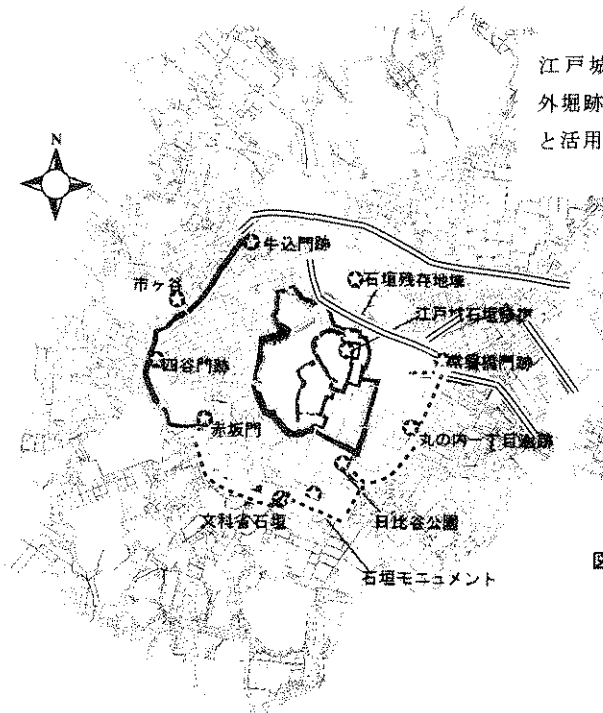


図 1

その外側は、いわゆる御府内と呼ばれる江戸市中の範囲です。実線、二重線、点線の三線は、江戸城の総構えを造る堀です。いまはこの辺りは皇居、皇居外苑になっていますが、それが内郭、それを取り囲むように隅田川があって、浅草橋からずっと螺旋状に巡る外堀が築かれてい

ます。牛込から赤坂は寛永一三年に最終的な工事で築かれた範囲になります。

江戸城はほぼ千代田区を占める範囲で、面積は外郭で一〇〇〇ha程度です。とてつもなく大きな城です。

図の実線が、特別史跡江戸城跡、史跡江戸城外堀跡で史跡指定されています。二重線は堀として残っている範囲で、点線は埋め立てられている範囲です。印の地点は石垣が残存、活用、保存されているところを示しています。

江戸城は、台地と低地の部分に縄張りをする城で、その地形的な特徴が、遺跡としての差で現われます。

写真1は、千鳥ヶ淵から竹橋に向かう道路から見える風景です。千鳥ヶ淵は台地の中に縄張りをして堀を造った所です。鉢巻土塁と言って、土塁を使って守る構

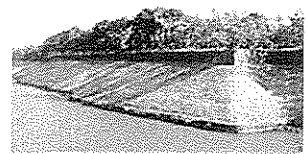


写真 1

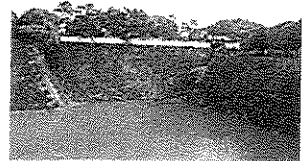


写真 2

造になっています。それに対して、低地の竹橋は、坂を下って行くと、落ち際の所が歩いていて分かりませんが、そういう所では、いきなり高い石垣が出現します（写真2）。大手町、日比谷に至るまで低地ですが、このそびえたつ高い石垣が江戸城の防御の要になっています。

江戸城は、大手門などの枡形門や櫓がいくつか残っています。富士見櫓や西の丸には伏見櫓、多聞櫓が残っています。それから天守台等、さまざまな江戸城の遺構が現存しています。

特に石垣は良好に残っていて、西枯橋の所の石垣は、公開はされていませんが、高い石垣が造れない時代のものと思われまます。これは、江戸城が慶長期の天下普請の前後に体裁を整えていく中で、最初に造られた石垣で、階段状に造っています。そのほかに、打込ハギという石垣、切込ハギという煉瓦積に近い石垣もあって、石垣の歴史が分かる形で皇居周辺に保存されています。

最近、皇居の中の石垣が緩んできて、修復工事をするため、江戸城の中で様々な調査をしています。その過程で多聞櫓の遺構が一部見つかり、解体した上、全く同じ形に修復して、また土に戻しています。そのほかに、櫓跡も埋もれています。

江戸城外堀跡は、牛込から赤坂にかけての台地の中にいくつも谷があつて、それを利用して堀が造られ、土塁があり、いまは遊歩道として歩けます。

虎の門辺りでは石垣が点在します。また、江戸城の外堀の中では櫓はほとんど存在しないのですが、溜池の辺りに櫓が二か所あつて、その一部の角石が保存されています。それとともに文部科学省の中に、石垣が一部保存されています。

外堀の中に牛込・四谷・赤坂門などの城門があります。大半の城門は撤廃され、面影は残していませんが、いくつかの遺跡の発掘調査や、史跡の現状変更の中で、石垣が出てきた事例があります。

四谷門は部分的に石垣だけが残っています。ロータリーの所はまるまる城門で、渡槽門と高麗門がありました。トイレの改修時に、石垣が出土し、おおよそ枳形門の復元ができました。そして、タイルの一部を変えていただき、本当に表示だけですが、説明板を設置して、タイルを変えた部分が、もともとの枳形門の一部があつた所という表示をしています。

牛込の門についても説明板を設置させてもらい、枳形門全体の構造を説明しています。外堀の中で石垣が橋の両側に残っている唯一の枳形門がここにありません。富士見教会を造ったときに石垣の石が

出てきて、「蜂須賀阿波守」と、まさに石垣を造った大名の名前が書かれており、それを近くに移築して表示しています。

文部科学省の江戸城外堀跡は部分的に、史跡に指定されています。そこに大規模な再開発があるということで、調査をしたところ、高さ六m以上の石垣や、長さ三〇m以上の新たに発見された石垣もあり、すべて全面保存して、手で触れて石垣を見える形に整備していくことになりました。

東京駅からは、第一期目の発掘調査のときに、八重洲口に約二〇〇mの石垣が出てきました。石垣の現地保存は難しいのですが、石川後楽園の築地堀の下に石垣を復元しています。路面上に、これが江戸城外堀跡の石垣であるという表示をしました。現地から離れてしまいました。が、東京駅から出てきた石垣を、千代田区の隣の文京区で見ることが出来ます。

日本橋川の石垣は、護岸改修で壊されたものもありますが、当時の石垣が護岸に使われて、いまも残っています。また、一回解体したものが丸紅の裏側に石垣として再生されています。それから日比谷公園の中にも残っています。このように江戸城外堀の石垣が千代田区内各所で残っていて、これからはそれを活用していかなければいけないと考えています。

写真3は、子ども

達が船に乗っています。これは、千代田区の中で、文化財などを頑張って公開している人たちがいて、「神田川船の会」という団体をつくって、毎年二回小学生を対象にして、神田川、日本橋川を紹介する事業をしています。それから千代田区と提携して、年に一回大人を対象として神田川と日本橋川を巡るコースもありました。二年ぐらい待たないと船に乗れないというぐらい、非常に人気があります。川から石垣を眺めるとか、お茶の水の溪谷を眺めるなど、普通では見られない体験をするということで、非常に人気のあるコースです。



写真3

後藤 宏樹 / ごとう・ひろき。千代田区立四番町歴史民俗資料館学芸員。一九六一年熊本県生まれ。東洋大学文学部史学科卒業。國學院大學大学院文学研究科考古学専攻修士課程修了。千代田区教育委員会。著書に「江戸遺跡出土食器の変化と特質」「國學院雑誌」九三巻一二号、「民具学と考古学」「民具マンスリー」二五巻三号、「博物館における文化財情報システムについて」「國學院大學博物館学紀要」、『発掘が語る千代田の歴史』（千代田区教育委員会発行）（共著）、「大江戸地下探検―遺跡にみる江戸」『図説大江戸ウォーク・マガジン 別冊歴史読本』がある。

江戸遺跡から都市江戸の開発を探る。

事例報告 (2) 汐留遺跡

佐藤 攻



『汐留遺跡』の活用と現状

今日は「よみがえれ江戸遺跡」というテーマで、港区東新橋一丁目にあります汐留遺跡の発掘調査によって発見された成果の活用例について報告します。

現在「シオサイト」という名称で有名な観光スポットになっているところですが、ここでは、江戸時代から明治時代の初めにかけての遺構が発掘されました。大名屋敷(龍野藩脇坂家・仙台藩伊達家・会津藩保科家等)の跡や新橋停車場の跡が、重層的に検出されました。

発掘調査によって、大名屋敷の礎石、上水、下水、堀、船入場、その他多くの土木工事跡と、旧新橋停車場とその関連の遺構が確認され、江戸時代から明治時代に使われた陶磁器類、金属製品、木製品、石製品が発見されています。

その発掘事例を基に、その中の遺構等

がどのような形で保存され、また活用されているかを写真でご説明いたします。汐留遺跡自体は、私も東京都埋蔵文化財センターが、平成四年(一九九二年)から平成十三年(二〇〇一年)まで発掘調査を実施しました。三次にわたる報告書を刊行し、いま最終の報告書を書いています。

まず江戸遺跡として、発見されたものの保存と活用についてお話をします。

後藤さんのお話にあつた寛永九年(一六三二年)「武州豊島郡江戸庄図」の少しあとの時期に、仙台の伊達藩が屋敷地として日比谷入江の葦原の土地を拝領します。屋敷を建設するにあたって大土木工事が実施されたようです。広大な面積の土地に杭列を何列も打って、竹を柵に組んで土留工事をし、土地造成を行っている

ます。写真1は、土留工事の杭列を発掘調査している状況です。

写真2は、その一部を保存するために、剥ぎ取り工事をしているところです。この剥ぎ取ったものは、江戸東京博物館に常設展示されています。

昭和通りの汐留から銀座へ向かつての途中に歩道橋があります。歩道橋を新しく架け直すに当たって、東京都の建設局が、脇坂家から出た神社で使われていた手水鉢を何とか活用できないかということになりました。その結果、写真3のように、歩道橋の階段の下に説明板と手水鉢を置いて活用したのです。実はここには、人が住み着かないようにという意味も含めて活用を図ったのですが、しっかりと居座っている人がいます。写真を撮ってもビクともしないという状態です。

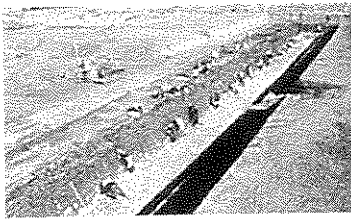


写真 1

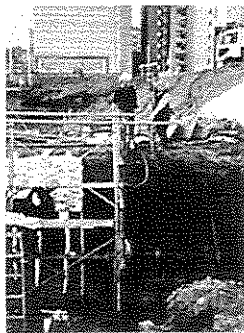


写真 2



写真 3

変な活用になってしまったかなというのがこの事例です。

明治五年（一八七二年）に新橋停車場が開業しますが、写真4は、そのころの機関車の転車台です。この転車台は、平成四年（一九九二年）、発掘がスタートしたころに見られました。いくつかの市民団体等から何とか保存できないかという話がありまして、事業者と協議をしました。その結果、現地保存はできないが、移築して何とか保存をすることにしました。石を全部取り上げて、一〇年間ほど小屋の中にしておきました。

街区に向かって保管された転車台は、現在の鉄道の東側で確認されたものです。西側のは新橋のJRA馬券売場の建物前の広場に、転車台の石材を活用したモニュメントとして、説明板も

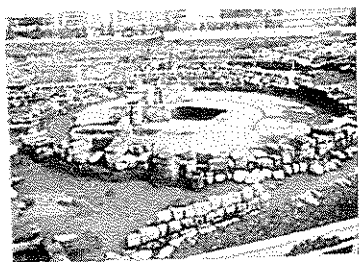


写真4



写真5



写真6

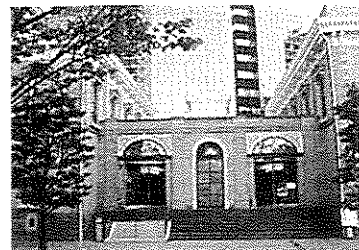


写真7

埋め込まれて出来上がっています。

写真5で見られるように、転車台の丸く並べられた石と内側の石と外側の石とを変えて、転車台が分かるようにと工夫したので、人がつまずかないように真つ平に造ってくれたので、低い位置から見るとよく分からないのです。JRAの上のほうから見るとよく分かるのではないかと思います。一応ここに移築して活用したというのではなく、表現したというレベルだと思います。

写真6は新橋停車場の駅舎とプラットフォームホームの全体です。手前が銀座側になります。中央下部分は、昭和四〇年（一九六五年）に指定された「新橋・横浜間鉄道起点」という国の史跡で、広さは約一七〇m²です。発掘調査によって確認されましたのは、まず手前の部分になりま

すが、駅舎の跡、そして先に真すぐ延びるプラットフォームです。ホームの長さは一五二m弱あります。この史跡を全体に拡大して、是非残したいと長いこと協議をしました。そのころ、まだ街区等の全体の建築計画が一切決まっていな段階の協議でした。何とか残せないかという話を続けました。そして、ホームの長さの三五mまでは現状で残そうということ、三五mまで残り、それ以外のホーム部分は調査をして記録として残すことになりました。

平成八年（一九九六年）に「旧新橋停車場跡」として史跡の一部解除・追加指定・名称変更がされました。更に、平成一二年（二〇〇〇年）に駅舎復元にあたって追加指定・一部解除が行われました。写真7は復元された新橋停車場の正

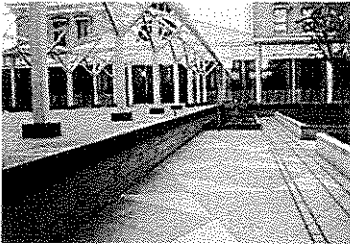


写真 8



写真 9

面の状況です。東日本鉄道文化財団が管理していて、建物左側部分が展示等の博物館的施設になっていて、残りの大部分は店舗・食堂等の利用となっています。

写真 8は駅舎の裏側から見た現況で、プラットホームと鉄道起点の復元状況です。写真でもお分かりのように、建物の外側にいろいろな宣伝看板等がないところがすつきりとしていいと思います。これは文化庁の強いご指導があったと言われています。

写真 9は展示場の部分です。パンフレットを持って汐留遺跡で出土した遺物の展示を見ている人たちに出会いました。足下のガラスの下に史跡の一部である駅舎の基礎が見られ、この上は歩ける状態で展示されています。

正面玄関の階段、駅舎建物の基礎、プ

ラットホームの基礎の一部は、ガラス越しに史跡の現状を見ることができません。いまのところ、まだカビは生えていませんが、いつ生えるか不安です。

現在、汐留には、国史跡「旧新橋停車場跡」の上にモニュメントというか復元駅舎が建っています。これは文化庁と長い間協議をした結果です。国の史跡については、現状を一切動かしてはならない。上へも下へも、右も左も動かしたら史跡ではないというのが基本的な理念であることを確認しました。

もう一つは、史跡を動かさないのであれば、史跡の上と下の活用についてはやむを得ないのではないかと。特に東京では土地の価格の高い所は、何とか手法を考えて史跡を残す手法をとるならば、上と下の活用については構わないのではないかと

う話を受けて、駅舎基礎と三五mのホームが残るようになったわけです。

新橋停車場の下も活用され、全面的に地下駐車場です。また、上は一部見られる状態にするため、ガラスで覆って、それ以外は土盛りをして、新しいモニュメントを造って活用しています。

汐留では、それ以外にもいろいろと出土しています。例えば、伊達家の屋敷にあった正門跡の石敷です。これは、仙台市が青葉城の所で、是非復元したいというので、預けてあります。新橋停車場の火力発電所の煙突基礎については犬山市の明治村に復元されています。

以上、江戸と明治の遺構についての活用例の一部を汐留遺跡の中から報告させていただきます。

佐藤 攻/さとう・おさむ。財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター特別調査専門員。一九四三年東京都生まれ。明治大学文学部史学地理学考古学専攻卒業。明治大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了。東京都教育委員会。財団法人東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター調査研究部長。著書に「文化財保護行政の現状と課題」「文化財の保護 二八」「再開発と埋蔵文化財調査」「宅地開発一六二」「港区東新橋 汐留遺跡―江戸時代大名屋敷の発掘調査―」「東京湾二〇八」がある。

事例報告(3)

大阪における遺跡の保存と活用

―難波宮跡・大坂城跡―

住友銅吹所跡など―

松尾 信裕



■市内に点在する復元遺構と展示施設

今日は「よみがえれ江戸遺跡」ということで、大阪の事例を報告します。

大阪には近世の大坂城跡や城下町跡のほか、飛鳥時代の難波宮という宮殿の遺構があります。その宮殿遺跡は一九五四年(昭和二十九年)から発掘調査を行って、二〇〇四年(平成一六年)は五〇周年で、その記念事業をたくさんやっています。

難波宮は国史跡で、大化改新のあとにできた孝徳朝の前期難波宮と奈良時代の聖武朝にできた後期難波宮の二時期の宮殿遺跡で、それらが同じ位置に重なっています。一九六二年(昭和三七年)に難波宮大極殿保存運動がありました。この前年に見つかった後期難波宮の大極殿の位置に第二合同庁舎建設が計画された

ので、それに反対する市民運動がおき、その結果、保存できたのです。その場所が一〇万㎡の広い史跡公園となり、奈良時代の聖武朝の大極殿基壇や前期難波宮の建物の跡も遺構表示したりしています。まず先にそれを見てみましょう。

写真1は一〇万

㎡の史跡公園の中を、発掘調査の成果に基づいて基壇を復元しています。

写真2は大坂市

域の地図で、薄く色を塗っている所が主な遺跡です。

写真の中の●印は発掘調査で見つかった遺構を復元や保存して見学できるようになっている場所で、○印は我々が街角ミュ

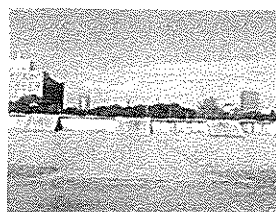


写真1

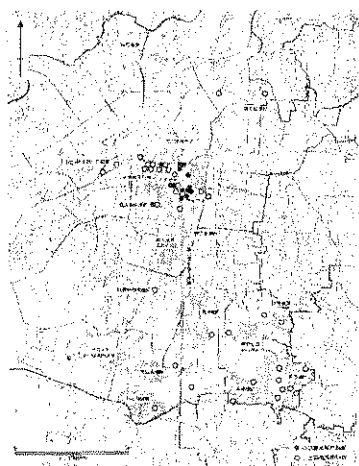


写真2

―ジウムと呼んで、出土した遺物を通りすがりに見学できるようにしています。

今日は発掘調査で出てきたものが、どのようなになっているかを紹介いたします。

写真3は難波宮史跡公園に立つて写真

真を撮りましたが、この位置から難波宮大極殿とその向こうに大阪城の天守閣が見えるというのが大事です。斜めに白く写っているのが阪神高速道路です。前期難波宮の大極殿相当の建物の真上に高速道路が通るといふ話になり、どのように遺跡を守るかということ。喧々譁々になりました。トンネル案とか大吊橋案など、いろいろ案がありました。当時、高速道路は難波宮の両脇までできていたのですが、ここに難波宮があるから、それを潰したらあかんということで、高速道路を地上にして下ろしてしまつたのです。そうすることで橋脚は造らなくていいわけで、盛土をすれば下にある遺構も守ることができま

す。難波宮の公園から大阪城が望めます。ここに来れば大阪の古代も近世も見られます。逆に大阪城の公園に行つて、南を見ると四天王寺の塔

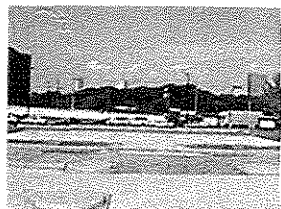


写真3

もかすかに見えます。高速道路の橋脚や橋桁が邪魔にならずに難波宮史跡公園が見わたせます。

写真4は西から

高速道路が下りていく状況です。公園の西端で高速道路が下がっていくのが見えます。難波宮の北側にはビルを建てるようにしています。

大阪市民が大阪市を相手取って「難波宮の文化財訴訟」をしました。「私の遺跡を潰したらあかん」という裁判をして、結局一〇年ほど経って、大阪市と和解をしています。これから文化財をちや

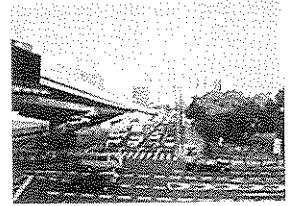


写真4

んと守ります」という和解条件を入れました。

写真5は発掘調査をした場所ですが、前には緑地があり、ちよつと奥にマンションが建っています。写真6は難波宮の南門が出てきた位置です。そこにマンションが建てられるとき、教育委員会と事業主さんとで相談をして、建てる位置を変更してもらいました。門の柱の位置を緑地の中に表現しています。

写真7もビル予定地でしたが、前期難波宮の建物が見つかかったので緑地にして、コンクリートの柱で昔の建物の柱位置を表現しています。この地表下一〜二mの所に遺構は残っています。写真8は解説板と遺構表示です。

写真9はマンションを建てるときに

難波宮の建物が見つかかったので、前の道路より地面を嵩上げさせ、建物の基礎を減らして、空間を広く取れるピロティ方式にして、遺構表示をしています。

別の所でも空間を広く取って、ピロティ方式にして下の遺構を残し、併せて盛土の上部には遺構を復元しています。

写真10は大坂城の遺跡ですが、発掘調査したあと、敷地全域に工事することになったので、敷地内で見つかった石垣を、移築して道路の端に復元しています。

写真11は江戸時代の大川の護岸の石垣で、ビル建設で見つかった石垣を移築復元しています。

写真12は武家屋敷跡です。発掘調査では築地塀と門が見つかりました。敷地全域を工事したいと言われたのですが、遺



写真5

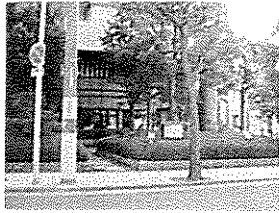


写真6



写真7

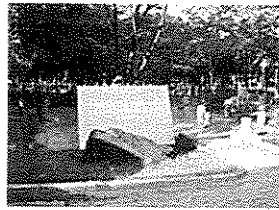


写真8

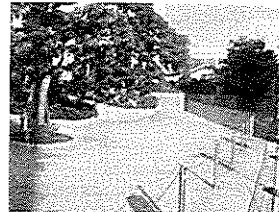


写真9

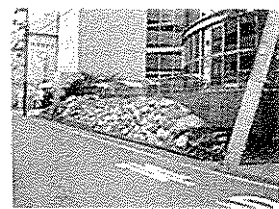


写真10



写真11

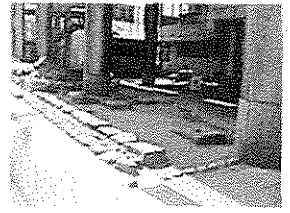


写真 12

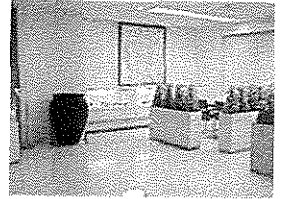


写真 13

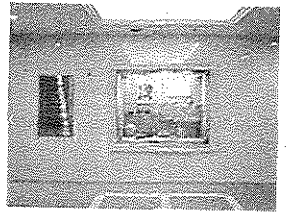


写真 14

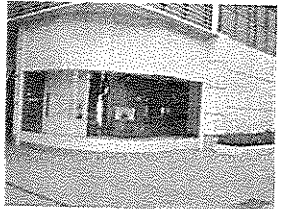


写真 15

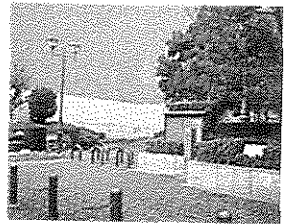


写真 16



写真 17

跡をあまり壊さないようにピロティー方式を採用してもらい、建物本体はできるだけ奥まで下げ、その手前の広い空間は喫茶店にし、周りは遺構の石垣や門の礎石を移築復元し、道路から見られるように展示しています。この建物の中には展示室を設けて、調査で出てきたものが見られるようになっております。こういうのを街角ミュージアムと呼んでいます。

写真13は船場にある民間の製薬会社の受付ホールです。玄関ロビーには「この地より発掘された埋蔵文化財」と書かれたものと、遺物が展示されています。**写真14**も道修町にある製薬会社で、玄関ホールに出土遺物が並べてあり、平日と土曜日は見ることが出来ます。この会社から展示したいという要望があつて、一年交替で更新をしています。我々が必要なときには「ちよつと貸してください」と言つて借りています。

道修町には別に資料館があつて、発掘調査で出てきたものを展示しています。

写真15は中之島の発掘調査で見つかった蔵屋敷の跡です。出土遺物を会社の入口の辺りに展示したいということになりました。展示施設も向こうで造つていただき、あとは我々が展示設計しました。町の中にこうした街角ミュージアムをもつと展開しようと考えています。

写真16は住友銅吹所跡ですが、住友銅吹所は敷地全体が四〇〇〇㎡あります。最初は東端の七〇〇㎡ほどを緑地にする予定だったので、調査でいろいろな物が出土したため、敷地の二五％を緑地にして、そこに明治最初のビリヤード場を復元したり、炉跡も展示しています。ビルの北側の壁には『鼓銅図録』の挿図をポスターにして展示してあります。

写真17は大阪にある「歴史の散歩道」の案内標柱と、それとわかるブロックタ

イルです。これをたどっていけば、あちこちの遺跡に巡り合えます。パンフレットも作っています。

こういうことはどうしたらできるかを簡単に言いますと、発掘担当者の熱意、一生懸命やることです。事業主に思ひ切り説明することです。見学にきた人には何が分かったかを丁寧に伝えること、あとは行政担当者の努力、原因者に対して理解を得ることだろうと思います。

松尾 信裕/まつおのぶひろ。財団法人
大阪市文化財協会課長代理。一九五三年佐
賀県生まれ。立命館大学産業社会学部卒業。
著書に「近世大坂の町屋」「近世大坂の都市
空間と社会構造」山川出版、二〇〇一、「戦
国時代の大阪」『戦国時代の考古学』高志書
院二〇〇三、発掘調査報告書『大坂城跡Ⅵ』
『大坂城跡Ⅶ』『大坂城下町跡Ⅱ』『住友銅
吹所跡』がある。
中世末から近世の都市空間構造を研究テ
ーマとしている。

事例報告(4)

ホテルJALシテイ長崎ほか

扇浦 正義



■はじめに

私は東京で一〇年、長崎で一〇年ほど近世都市の発掘調査に従事してきました。現在は二〇〇五年秋に開館予定の長崎歴史文化博物館の建設準備に携っています。最近の九州における遺跡の保存・活用事例としては、原始・古代遺跡では老岐の原ノ辻、佐賀の吉野ヶ里、宮崎の西都原古墳群などがあります。長崎県内の近世遺跡では、平戸や出島のオランダ商館跡などがあります。

■観光地・長崎

長崎は異国情緒豊かな観光地で、遺跡の発掘成果を観光行政に活用できないかという意見がよく出ます。そこで、まず長崎の観光概要を紹介したいと思えます。写真1は長崎の町。南面に海が広がった入江です。波が静かで、貿易港に選ば

れました。三方を山に囲まれた「坂の町」です。写真2は長崎の夜景。「一〇〇万ドル」から「一〇〇〇万ドルの夜景」に値上がりしました。写真3は原爆の「平和記念像」。昭和三〇年(一九五五年)に長崎県出身の彫刻家、故・北村西望によるものです。写真4はグラバー園。幕末にイギリスから来たトーマス・グラバーの邸宅などがあります。写真5は国宝の大浦天主堂。一八六四年(元治元年)に造られた教会で、日本最古のゴシック式建造物です。写真6はオランダ坂の石畳雨の日に傘をさして歩く姿が印象的です。写真7は国重文の崇福寺山門。火災によ

り一八四九年(嘉永二年)に再建。町の周囲には、中国寺院が点在しています。写真8は国重文の眼鏡橋。日本最古のアーチ式の石橋で、一六三四年(寛永十一年)に中国人が寄進しています。

■江戸時代の長崎

写真9は江戸前期の長崎の町絵図。江戸幕府の直轄地(天領)でした。長崎の町全体が貿易会社のような組織で、町人は無税どころか、年に二回ボーナスまで出て、貿易の利益が配分されていました。写真10は江戸後期の長崎の様子。出島は二年間かけて一六三六年(寛永十三年)

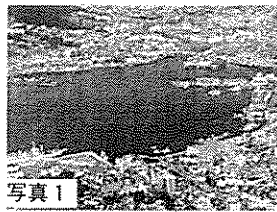


写真1

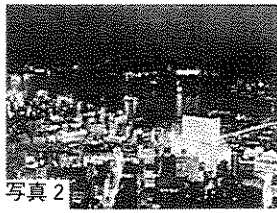


写真2



写真3

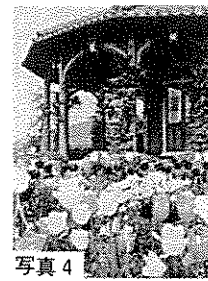


写真4

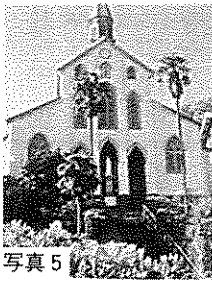


写真5



写真6



写真7

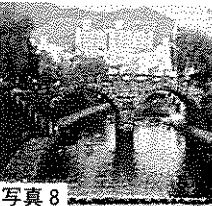


写真8

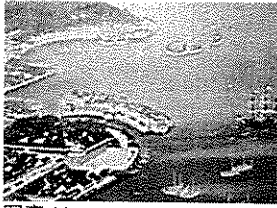


写真 11

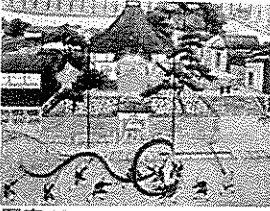


写真 12



写真 13

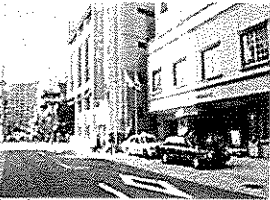


写真 14

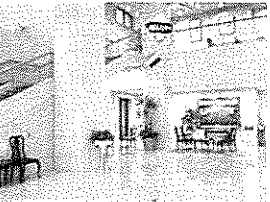


写真 17

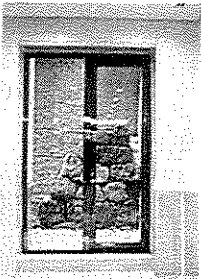


写真 18

に完成。当時、長崎市中にいたポルトガル人を一方所に集めて貿易の拠点としたのですが、翌年の「島原の乱」をきっかけに、出島から追放しました。一六四一年（寛永一八年）に平戸のオランダ商館が出島に移された後は、ずっとオランダの貿易拠点でした。

一方、中国人は出島築造後から半世紀ほどは市中に雑居していて、元禄のころには長崎の人口六万人のうち約一万人は中国人だったといわれています。しかし、諸事情により、一六八九年（元禄二年）

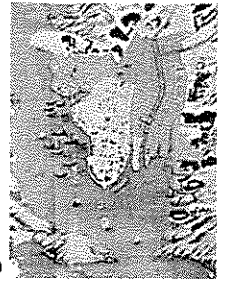


写真 9



写真 10

に唐人屋敷が設置され、一七〇二年（元禄一五年）には海辺に「新地唐人荷蔵」が築造されます。今回の報告は、この護岸石垣の調査活用事例です。

写真 11 は別の角度から俯瞰した出島や唐人屋敷、新地荷蔵の絵図です。幕末から明治にかけて、周辺はほとんど埋め立てられました。この荷蔵跡の一角にビル建設計画が持ち上がり、一九九四年（平成六年）に発掘調査が行われました。**写真 12** は唐人屋敷内の様子。中国風の龍踊り、航海安全の神様を祀る媽祖堂などがみられます。

■遺跡の保存と活用

写真 13 は新地中華街の様子です。**写真 14** は JAL ホテル。正式名称は、「ホテル JAL シテイ長崎」です。**写真 15** は発掘調査の状況です。**写真 16** は敷地の中央部分から新地荷



写真 15



写真 16

蔵跡の護岸石垣が検出された状況です。**写真 17 18** は JAL ホテルのロビーです。当初、現状保存を検討しました。ガラス張りにして、そのまま見せるという提案もありましたが、周りが海のため湿度が多く、黴や苔などが生えます。それを防ぐには、周囲をすべてコンクリートで固めるしか方法がなく、それには莫大な費用がかかります。法的には原因者に保存していただく強制力はなく、保存のお願いしかできません。相手が無理だとさえいえないかもしれません。幸いにもホテルの社長さん（陳東華氏）が在日華僑の方で、文化事業にとてもこ

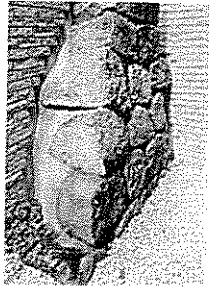


写真 19

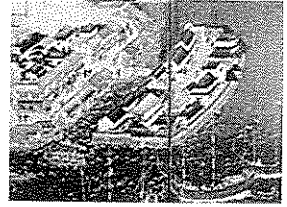


写真 20

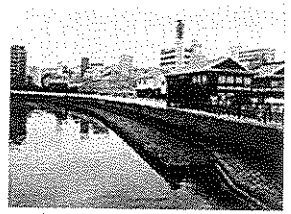


写真 21

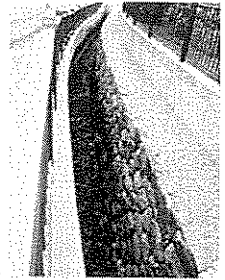


写真 22

理解がありまして、石垣の一部を移築保存することができました(写真19)。

当初はもつと多くの石垣を保存できないかと考えたのですが、重量等の問題で、これ以上は積み上げられないとのことでした。強固な石だけを選んで積み上げてはどうかとの意見もありましたが、それはこちらも譲歩できない。ランダムに積み上げてしまうと、あまり意味がないので、石垣に番号を付けて順番どおりに移設しました。費用はすべてJALホテル持ちです。一部保存できただけでも充分ではないかと思えます。

写真20は出島オランダ商館跡。大正時代に国史跡になっていきます。出島の復元整備は、国と長崎市を挙げての公共事業として、二〇一〇年(平成二二年)までに商館長部屋やヘトル部屋、カピタン部屋など二五棟を復元する予定です。

写真22は南側護岸石垣の整備状況。下

半分が当時の石垣で、上半分は現在の付け足しです。出島の整備は、波多野先生や神奈川大学の西和夫先生のご尽力によるものです。

これで事例報告を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

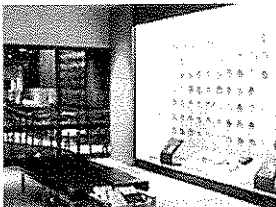
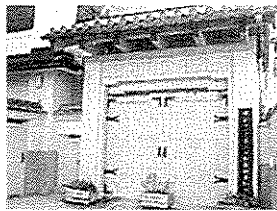
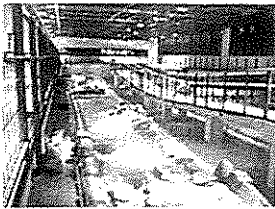
扇浦 正義/おうぎうら・まさよし。長崎県都市再整備推進課学芸員。一九六三年広島県生まれ。国学院大学文学部史学科卒業。著書に「江戸発掘」・「図説 長崎県の歴史」(共著)、「近世日越交流史」(共著)、「掘り出された都市」(共著)などがある。
東京や長崎において、近世遺跡の発掘を手がける。現在は、二〇〇五年(平成一七年)秋オープン予定の長崎歴史文化博物館の建設準備を担当する。

(追記)

長崎では今回の事例報告のほかに、「サント・ドミンゴ教会跡資料館」が、二〇〇四年(平成一六年)三月にオープンしています。

新校舎建設に先立って発掘調査された、長崎市勝山町遺跡(桜町小学校内)に所在します。

長崎代官屋敷跡の下層から、全国的に珍しい江戸初期の教会跡が発見されたため、設計を変更し、資料館を校舎内に設置しました。



よみがえれ江戸遺跡

―都市遺構の保存と活用に向けて―



小林 克
(司会)

○小林 まず私のほうから、今日の発表について感想を述べさせてもらいます。

基調報告ですが、谷川さんからは、遺構の保存および活用についての基本的な現状の発表がありました。その中で、江戸遺跡は調査事例が非常に多く、発掘事例も多いという状況があるが、実はこれは今だけの状況で、もしかしたら二〇年後には全然なくなってしまうのかもしれないというお話は、非常に大きな問題をはらんでいるように思います。

活用の方法と相まってガイドラインを考える必要がある、つまり再現するときの基本的な考え方をきちんと持つていく必要があるというご指摘がありました。

谷川さんの「土地の記憶」という言葉は、一つのキーワードではないかと思えます。私は前から「都市の記憶」という言い方をしているのですが、都市や土地

の記憶をどう残していくのか、伝えていくのかというところが、大きなキーワードになるのではないかと思っています。波多野さんには、海外の各地の事例を紹介していただきました。それぞれの時代でできることをきちんとやっていく、という言葉がありました。この「きちんとやっていく」という部分は非常に含蓄のあるご指摘だと思いました。

私は以前、インドネシアのバンテンの発掘に行ったことがあります。そこは今でも宗教的な聖地なのですが、オランダの植民地の拠点にもなった所です。その前にはバンテン王国があった所です。そういった所での保存や活用の事例もあります。

また、イギリスのヨークで、大きな商業施設をつくるときに、発掘によって地下からバイキング遺跡が出てきた。それを発掘用の施設にして、ヨービックセンターというものをつくった。考古学的なデータから生活の様子を再現したのです。本来は建築するはずではなかった地下二階部分に、そういうカリブの海賊のようなバイキングセンターをつくって、それが非常に人々を呼んでいるのです。一〇年ぐらい前ですが、一年間に一〇〇万人近くの観光客を呼ぶ施設になっていました。後藤さんからは、江戸城関係の遺跡の

保存と活用の事例を報告していただきました。また、東京駅の発掘などで出てきた石垣を現地保存する、できない場合は移築保存するというお話もありました。保存、保存と言っていますが、活用という方向も考えなければなりません。

そうした中で、理念と計画を持つ必要性、整備・活用の手法、技術的な手法と今後の体制整備というお話がありました。佐藤さんからは、汐留遺跡を中心にいろいろな遺構、石垣等の活用、新橋駅の保存と活用の事例の報告がありました。

松尾さんの発表では、大阪では熱心に、先駆的に取り組んでいることを知り、びっくりしました。特に街角ミュージアムです。民間のビルの中にも展示スペースがある、遺構、遺物が残っているというお話でした。大阪にとっては銅吹所跡も多数ある事例の一つなのだということがよくわかりました。文化財をきちんと保存し、都市の中で活用していくということでは、大阪は先行しています。

扇浦さんは、JALシティホテルの中で遺跡の一部が保存されているというお話をしてくださいました。

これからの問題は、どのような戦略を持って、都市計画の中にどうやって遺跡や遺構を組み込んでいけるのか、ということだと思えます。その背景には、埋蔵

文化財保護法というものがありません。現在、周知の遺跡を発掘調査する場合、開発をする人たち、業者（原因者）がお金を出してやるという部分があります。そうした中で、保存や活用はその義務に入っています。そういう状況がありますので、発掘と都市の開発というのは対立する概念として捉えられてきましたし、いろいろな保存運動が起こると開発側は非常に困るという状況は、今もあるわけです。でも、そういう保存か開発かという話でいいのかわからない方法が考えられるのではないかと。出てきた遺構、遺物を、新たな都市、我々が暮らす都市の中で生かしていく方法はないのかと思うわけです。

例えば汐留遺跡についてもいろいろ事例が出ました。あそこにも博物館施設があります。文化庁の考え方もわかりませんが、巨大なビルをつくって、その一階や地下一階に展示施設をつくるだけではなくて、建築をする側の人たちとすり合わせをしながら、アミューズメント的な要素を持った施設をつくることもできたのではないかと私は考えています。

発表者の皆さんからご意見をいただき、前に、会場から扇浦さんへの質問票が三枚きておりますので、まず、その回答をお願いします。

○扇浦 質問の一枚目は「新地の前の湊公園も海だったのでしょうか」ということですが、江戸時代は海で、明治時代以降に埋め立てられ、湊公園ができました。

二枚目は「大浦川、大波止付近に倉庫群があったように思うのですが、まだ残っていますか」という質問です。まだ少しは残っています。「護岸にステップがあった」とのことですが、これは場所がよくわからないのですが。

三枚目は「JALホテル建設地の石垣は埋められてしまうのですか、プランニングの中で一部残せないですか、例えば床下をガラスホールの上から見せるなど、昔の長崎の姿を残してほしい。唐人屋敷は残っていますか」という質問です。当初は、地下から検出されたままの位置で、床面をガラス張りにして、上からロビー部分を見せられないかという案を持ちかけて、建築の方とも協議したのですが、もともと周辺が海だったこともあり、今でも湿気がかなりある。ちよつと掘ると潟のような状態で水も湧いてくる。そういった中で地下数メートルの遺構を残そうとすると、四方と底の部分をすべてコンクリートで一旦打ち固めて防水対策をしなければなりません。造つてすぐはいが、何か月かして湿気がたまってくると、苔や黴などいろいろなものが出てき

て、汚くなって見えなくなってしまう。その辺のメンテナンスがかなり大変だということと、周囲をすべてコンクリートで固めるとなると、一旦石垣を移設して再構築しなければならず、多額の費用がかかってしまう。民間の方に何千万、何億とかかる仕事を頼んだり、将来ずっと続くメンテナンスを頼んだりするのは不可能だということで、断念したのです。

唐人屋敷は、当時の堀や石垣など、いくつかは残っています。土神堂、天后堂といったお堂も少し残っています。去年、長崎市に唐人屋敷復元推進室ができて、これからのいろいろな開発等をしていく中で唐人屋敷も復元・整備していくという動きがスタートしたところです。

○小林 ありがとうございます。

次に、各発表者に、今日のポイントである保存と活用、特に活用について、その手段や手法は今後どういう形がいいのかをお聞きします。また、そうしたときの問題点、予算の問題も出ていましたが、クリアする方法などについて、ご意見をいただきたいと思えます。

○松尾 先ほど、大阪歴史博物館の地下遺構の話がありました。博物館は、難波宮跡遺跡の範囲の中にあります。そこ

では、前期難波宮、七世紀代の宮殿の倉庫群が見つかっています。この倉庫群は、前期難波宮の大蔵省に当たる倉庫だといふことがわかっています。この前期難波宮は、朱鳥元年（六七二年）に焼失しています。火元は大蔵省であると言われている、その倉を見つけたわけです。そこで、その倉の建物の遺構を、上に建つNHKや歴史博物館の基礎で壊さないように、地中に残しながら建てています。

それらの建物は地面から1mないし2mの間で見つかるのですが、それは地下一階ぐらいの深さです。歴史博物館の地下二階と三階は駐車場になっていますので、途中で枝のように残っているのです。外に飛び出た状態で残している。下にコンクリートを打って、古代の建物の部分だけを残しています。乾燥が進まないように、ずっと温湿度管理を続けています。

このように遺跡を保存して、一日に三回のツアーが組まれています。古代建物の柱の大きさが実感できます。近世の建物の柱は普通一〇cmぐらいの四角柱ですが、五〇cmも六〇cmもある柱の穴が見つかっています。博物館の外には古墳時代の建物を復元しています。それらは博物館とNHKの地下をグルグルと迷路のように通っていきます。

遺跡の保存・活用は、我々発掘をやっ

ている人間だけのものではなく、市民のものだということ、市民を我々の味方にしないと遺跡は守れないと思います。最近では現場を鉄板で囲い、見学者はなかに入れないのですが、例えば案内板をかけて、出土物を日々案内したり、可能な限り現地説明会を開催して、どういふものが見つかっているかを伝えることだと思えます。大阪の町は、そこに住んでいる人は少ないのですが、通る人は結構います。そういう人が、見学できる所を見て帰る。事業主さんが「これは大事なのかいな、残さないかんのかな」と考えるわけです。そこに我々が、部分保存や移築復元・出土品展示など、いろいろな手法をお願いしたり、勧めたりする。そして、例えば「それが、おたくの会社の名前を上げますよ」ということを言う。いろいろな努力をやつてその気にさせていかないと、遺跡を残したり、移築復元や出土品展示はできません。

遺跡を残していくことは我々がやっている仕事を伝えていくことでもあるし、遺跡を残していかないと地元の歴史が見えてこないと思うのです。いつの間にかコンクリートばかりになってしまふし、土地再開発というのは道路も町名も変わってしまう。そうすると、ここは何をやつたんやろな、ということになってしま

う。住民も変わってしまうと何もわからなくなる。図書館に行かないとわからない、ということでは駄目なのだと思います。日ごろから我々は、現場でいろいろな情報をどんどん出していく姿勢を見せていかなければいけない。その熱意が事業主さんや市民に伝わることで、もっと新しい展開が生まれてくるのではないかと思えます。伝わらないことも結構あります。でも、精一杯やつた上なら、次に頑張るか、ということになる。どこで間違うたかということをもう一ぺん反省すれば、たぶん次につながるんじゃないかと思えます。日々そういうことを考えていかんとあかんのやろうなと思っています。

○小林 ありがとうございます。

佐藤さんからもお話をお願いします。

○佐藤 先ほど報告しましたように、汐留遺跡は広く、大名屋敷の跡、新橋停車場の跡ということで発掘をしました。出てきたものは、遺構を含め遺物は非常に膨大な量です。特に江戸の大名屋敷というのは、大名屋敷をつくるために土地をつくつたという土地で、江戸の初めから、震災、火災等の歴史を含めて、江戸の最後まで歴史を刻んできました。

明治三年（一八七〇年）からは鉄道の

建設に入りました。新橋停車場は、大正一二年（一九二三年）の関東大震災で全焼するまでは、古い新橋停車場が残っていました。それまでの関東大震災も含めての記録が、全部土地に残っていました。それをどう生かすかが課題です。

いわゆる鉄道起点跡は一七〇mほどだったのですが、国の史跡に拡大して、一八〇〇mほどを現地に残すことができませんでした。それ以外に、多くの遺構が出てきていますが、現場で遺構を保存することが非常に難しく、いろいろ活用方法を考えました。例えば江戸博に剥ぎ取りの展示をしたり、仙台市に仙台藩の屋敷正門跡の石を運んだりしました。これは、まだ復元されていません。

そのほかに、伊達家の大名屋敷の大きな池を何とか復元保存したいということで、東京都の建設局が、石を預かっています。預かった当時の計画では、木場公園に復元したいということだったので、まだ復元はされていません。

そのほか、東京都水道局は汐留の上下木樋を大量に持っていて展示をしています。また、汐留から明治の煉瓦類と土管類が出土しました。土管は愛知県常滑製で、常滑の博物館が持っています。汐留の土管の特別展をやりました。当方はサンプル保存をしています。煉瓦は、煉瓦

の博物館が埼玉と舞鶴にあり、そちらに汐留から出た展示物を持っていきましました。いろいろな出土品を展示を条件に、五三か所ほどに長期に貸出しています。龍野市の歴史博物館、羽村の郷土博物館、舞鶴の煉瓦博物館、国立歴史民俗博物館、JR東日本文化財団、東京大学工学系研究室、昭和女子大学、窯業史博物館、会津若松市教育委員会などです。江戸博には貸出したものを移管してしまいました。汐留から出たものと、地元とのつながりがわかるような形で展示してもらっているというのが、汐留の活用です。

○小林 ありがとうございます。

後藤さんには、理念と計画、整備・活用の手法について今後どういう方向性があり、どの辺がネックになるのかという話をお願いします。

○後藤 問題点からお話します。千代田区内では、遺跡の表示をするということからでもいいから遺構の一部を復元しようとお願いをしています。でも、非常に難しいのです。何しろ壊すために調査をしているので、開発の中でその遺構の一部を再現するとか、含めるということとは、発掘をしている最中からその保存や活用の話をしなければいけない。特に開発の

主体者に一生懸命に説明をして、一部を開発の中に入れてもらうわけです。

特別な事例ですが、文部科学省の例をお話しします。遺跡を調査する組織とは別に、遺跡の調査と整備の委員会を作り、そこで議論をして、その結果、石垣を保存して、一部設計変更するということのようなことをしました。このように委員会等を活用することもできます。また、文科省が現地説明会を開いたところ、半日で二〇〇〇人という多くの人が来て、一時間待ちになり、開発側も積極的に遺跡の保存と整備に動きました。このように、開発者の理解がないとなかなかできないという課題があります。

江戸城は、もともと土の城だったものを、天下普請で石の城にしました。その理念というか縄張りが、低地の石垣と台地の土塁に表現されています。それは個別の遺跡を残しただけではわからない。景観や地形を残して、そこを歩いてそれを感じてもらおうという仕掛けが必要になってきます。大阪の事例のように、ガイドマップを作ったり、ルートを歩道に示したりして、地域の中の文化財の位置づけを評価して、つなげていくことが、これからの仕事になるのだらうと思います。観光的な要素も必要です。江戸城は大

体皇居になっていますので、私たちは入

れないのですが、一日当たり約一万人の観光客が来ています。東京の中の観光資源としては目をつけなければいけない場所ですが、お国なので千代田区も入れないのです。説明をするガイド施設はなく、パンフレットは整えてはいるのですが、なかなか活用することができない。そういう中で、江戸城だけではなくて外堀も含めた観光ルートの案内を考えていく必要があると思っています。江戸城外堀跡は昭和三十一年（一九五六年）に史跡に指定されます。このあたりの四ツ谷駅と飯田橋駅周辺は都会の中で高いビルがないのです。景観的に空が見える場所になっていて、緑や水辺が非常によく残っている。そういう公園的な使い方と、文化財の保護をどうするかということとを合わせて、総合的な観点からきちんと整備していかなければいけないと思います。

○小林 ありがとうございます。

それでは、谷川さんから、今後の江戸遺跡をどうすればいいのかということについて、お話ください。

○谷川 私は、今回改めて江戸遺跡の保存と活用の問題を考え直してみても、この問題は簡単にはいかならないと思っています。現実には、個々の遺跡の担当の方の情熱

が支えている部分がありますが、一歩引いて考えると、やはりもう少しきちんと論理化しなければいけないと思うのです。例えば、保存と活用と簡単に言いますが、保存というのは一体何なのか。保存したのだから活用すべきだ、という考え方は当然ありますが、論理が逆転してきて、活用する可能性の少ないものは保存する必要がないのだ、ということになりかねない。この点は私が非常に危惧する

ところだと思います。つまり、保存と活用の関係

を突き詰めて考えておかないと、いつの間にか論理が転倒する可能性がある。それが恐ろしい気がします。

もう一つ、遺跡の保存と活用には、いろいろな立場のさまざまな思惑が関わってきます。波多野さんは、遺構には再現性がないと指摘されましたが、考古学の発掘調査には本来再現性がないわけですから、発掘された遺構は、現地に残さず、開発される場合には壊される運命をたどる。したがって、考古学という学問は、資料保存の観点から遺跡保存の問題を考える立場にあります。ただ、学問的な資料は研究者だけのものではなくて、人類全体のものであるという考え方も存在しますし、それが文化財である以上は、当然活用され、公開されていくべきだという考えもあります。

一方、開発する側から見れば、遺構の保存とそれにかかるコストが見合うかどうか、多少コストをかけても保存を判断するかどうかという問題があります。さらに、保存された遺構を商業施設や観光資源に利用するというケースも考えられますが、そうした場合には当然利益の問題が出てきます。利益が上がらないので、保存した遺構を壊したいということもあり得るように思うのです。

また、保存した遺構の活用・公開にあたって、人を引きつけるためのいろいろな仕掛けをしていくときに、行き過ぎがないかどうかという問題もある。何が行き過ぎなのかはいろいろと議論があると思いますが、こうした問題も含めて、私はガイドラインという話をしたわけです。さらに大事なものは、そこに住んでおられる方々や、そこにお勤めになつていらっしゃる方々の意識です。先ほど後藤さんが外堀の話を読まれたことが、私が小学生の頃には、四谷から市谷の外堀の土手を「土手公園」と呼んでいました。もちろん外堀には遺跡、史跡としての意味があるわけですが、周辺住民にとっては魚釣りや桜の花見などをする公園でもあり、生活空間の中の景観のひとつになっています。つまり、保存された遺跡は、時間の経過とともに、いろいろな意識を持たれるよ

うになるのだと思う。

こうした江戸遺跡の保存・活用に関わる様々な問題をどのように折合いをつけるのか、ここで私が答えをきちんと提示することは無理です。とりあえず、問題の所在を確認しておきたいと思います。

○小林 ありがとうございます。

さきほど 松尾さんがおっしゃった、会社をその気にさせるとするのは、非常に大事だと思います。企業ですから、当然お金が大事です。それでは、どうするか。コストをかけてもやるべきなのだ、コストをかけてもやったほうがよかったのだ、という仕掛けをつくらなければいけないのではないかと思います。

後藤さんの発表の最後にありました、子どもたちが船で神田川を見る写真は、とても印象に残りました。私どもの江戸東京博物館でも、子どもの居場所事業というのをやっています。墨田区の子どもたちが親と一緒に来て、館の近辺を歩くのです。子どもたちは、単に親がマンションを買って住んでいるだけけれども、ここにこういう職人さんがいる、神社仏閣がある、庭園がある、チャニコ屋がある、というのを見て知る。そういう体験を博物館や社会教育施設が仕掛けて、皆さんの努力によって東京に少しだけ残っ

ている遺跡を活用すればいいと思うのです。

例えば、マンション建設業者は五〇〇万円をかけて、出土品の展示施設と、遺構を残した、それで、博物館や教育施設のツアーで二か月に一回都民が見に行く五〇〇万円かけただけで、いいことをしているということがわかってもらえる、というパンフレットを作る。また、苦勞して移設したもののマップを作って、博物館や社会教育施設がツアーをやり、残したものを活用する。そういうことを、

まず第一歩としてやりたいと思っています。実際の現場で考古学の人たちがハードに努力をするとともに、博物館や社会教育施設にいる者は、都市住民にそういったものを知らしめる。そういう活用もやっていく必要があると思っています。

ある陶磁器産地の町では、出土した陶磁器が壁に埋め込まれています。これは学問的には賛否両論あるのかもしれませんが、建築や都市計画の人たちと話し合いながら、出土した遺物を壁の一部に埋め込むということはできないかと考えています。サンプルを作ること、企業、役所、その地域にとって非常に得になるということ、今日のお話を聞きながら思いました。

その辺も含めて、波多野さんから、今

日の全体の感想や、建築の分野からはどういうことができるのかお話ください。

○波多野 歴史的な遺物にしる、遺構にしる、建築にしる、なぜ保存しなければならぬのか。ここにおいての方たちとは共通理解が得られています。ところが、普通はそうはいかないのです。

特にしんどかったのは、阪神大震災のあとで、六千人の命と文化財とどちらが大事だ、という立場に立たされたときです。誰だって「命だ」としか答えようがない。阪神大震災のときには仮設住宅の入居を抽選で決めました。そのため、隣近所が別々の仮設住宅に住むようになってしまい、暮らしの連続性が失なわれました。その反省から、今度の中越地震では、集落ごとに仮設住宅に引越すようになりました。これは一歩進歩したかなと、ニュースを聞いて思いました。

記憶の風景や生活の連続性を大事にしないと生活の再建はできません。生活再建の基盤になっていく部分に歴史はあると考えています。歴史を全部消去してしまつたところに生活の連続性を探すことは不可能です。保存は歴史趣味のおじさんのためにはありません。むしろ生活のためにはあるのだ、と強く感じています。そのために、いろいろ手法を開発しな

ければいけません。

ここでお金が問題になるわけですが、私はたまたまい経験をしました。私どもの大学が、カナダのクローズネストパスという田舎の村で、一九二三年（大正一二年）の裁判所を買いました。それは、カナダのアルバータ州の歴史的建造物です。それを、州の歴史財団と州に認定された修復建築家と共同で、学生の研修所に改修しました。ここには、非常にいい木の床があつたのですが、その上に、使いくいからということ、Pタイトルが張つてありました。このとき歴史財団の人は、「あなたたちが学校として使いたいということ、カーペットを敷くと、一万五千ドルかかる。このPタイトルを剥がして昔の床を蘇らせるという文化的な修理をする、二万ドルかかる。余計にお金がかかるが、文化的な修理をしてくれた場合には、州の歴史財団から半額の補助が出るから、最終的にはあなたたちは一万ドルの出費ですむ」と選択肢を与えられたのです。剥がしなさいという命令ではなくて、選択肢をきちんと与えて選ばせてくれる。そうすると、こちらは、最初は二万ドル出さなければいけないけれども、一年経ったら一万ドル戻ってくるから、そちらを選べる。しかも、小さな町ですから、その二万ドルが景気浮揚

策として有効に働くわけです。

さらにありがたいことがありました。私どもが納得したあとで、「Pタイトルを剥がすのはあまり難しい仕事ではないから、高齢者雇用促進事業団を紹介する。そこで安くやったら、もう少し助かる」と言ってくれたのです。許可申請的な判断ではなくて、一緒に残そうということが共通の理解となると、関係者みんなの発想が柔らかくなつていく。アイデアだなと思いました。所詮、ある程度のお金はかかる。でも、それは、歴史を次の世代に引き継ぐために有効に使いたいと思いません。

実は、面白い所で面白い言葉に出会いました。アメリカのナバホ族という人たちが残した言葉が、たまたま谷川さんと白川村に行つたときにお寺にかかつていました。「自然は祖先から引き継いだものではない。まだ見ぬ子孫から借りているものである」。これにはやられたな、と思いました。

○ 小林 ありがとうございます。

こういう現状があるということで、これから進む方向を、建築の保存、修復ということと兼ね合わせて考えていかなければならないのかなと思つています。今日は会場に、都市の建築や都市計画に造

詣の深い法政大学工学部建築学科の陣内さんがいらしていますので、一言ご感想をいただきたいと思ひます。

○ 陣内秀信（法政大学） 陣内と申します。この江戸東京フォーラムの委員もやっています。感想を少し述べさせていただきます。こういうテーマでフォーラムが開かれ、突っ込んで議論されたというのは画期的で、意味があつたと思います。現場で苦労されている方々のいろいろな成果を、興味深くうかがいました。

まず汐留の発掘が行われて、開発計画が議論されているとき、この出土した遺構を何とか残せないものかと思つていましたが、いろいろご苦労された上で、佐藤さんのお話にもありましたが、なかなか難しかったと。ただ、部分的ですが、新橋ステーションの遺構が見える形で残せたというのは、やはり一歩前進だつたと思ひます。松尾さんが話してくださつた大阪の事例は、大変な努力の中でクリエイティブにやつていらつしやるので、東京もまだまだ頑張らなければいけないと思ひました。

パブルのころに天王洲アイルの開発がありましたが、東京都の港湾局に非常に熱心な方がいました。あの石垣を何とか残したいということで、私もそのサポ-

ト役をしました。それから、芝浦のシー
パンスは運河に面した昭和初期の石垣な
のですが、そこも残した。東京は後藤さ
んが強調されたように、江戸城周辺に石
垣や土木遺構がたくさんあります。これ
は都市の骨格を浮かび上がらせる非常に
重要な要素ですので、ガイドブックを作
るなど、いろいろな努力によって、相当
可能性があるのではないかと思います。

私はイタリアのことをやっています。
ですから、ポンペイのような遺跡に行く
のも非常に楽しいのですが、実際に生き
ているまちの中に遺構や遺跡が顔をのぞ
かせていて、それに出会えるというのは
最高の喜びであり、豊かさだと思ってい
ます。「土地の記憶」とか「都市の記憶」と
いう言葉が出てきましたが、過去と対話
できる場所がたくさんあるというのがい
いのではないかと思います。

波多野さんが海外の事例をいくつも紹
介してくださいましたが、そこに行つて
みると、上手に活用されているという以
上に、非常に存在感があつて、人間の営
み、過去、現在、未来がつながつていく
本当にいい経験をさせてくれる場所なの
です。そういう場をつくらなければいけ
ないのではないかと思います。考古学の方
、建築の歴史をやっている方、建築の
デザイナー、都市計画家、ランドスケー

プの方々がまさに合同でやっていく大き
なプロジェクトとして考えて、経済人も
巻き込んでいかなければいけない。まだそ
ういう場や合意が日本社会の中には全然
できていないので、そこはヨーロッパか
ら大いに学ぶことが多いのではないかと
思いました。

今回は、本当に大きな方向づけがなさ
れたフォーラムだったと思います。

○小林

ありがとうございます。

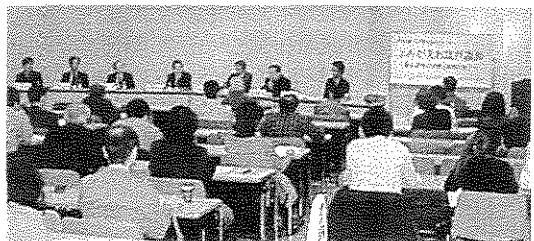
今日のフォーラムで、遺構や遺物はい
ろいろと残す努力がされている現状がわ
かりました。海外の先進的な事例や大阪
の先駆的な事例報告もありました。また、
陣内さんがおっしゃったように、建築の
人たちが都市計画の人たちとジョイント
して、プロジェクトとして取り組んでい
くということ、是非、都市考古学から
始めたいと思います。そのためには、こ
の住総研の江戸東京フォーラムはふさわ
しい場ではないかと思えます。今後、戦
略や理念という部分も、同時並行で議論
してつくっていくことが大事です。

私は、博物館の人間として、まず、考
古学に携わる者の努力によって、残った
遺跡、遺構、移設されたもののマップを
作って、市民の方、都民の方に参加して
もらい、江戸の遺跡ツアーをやる。解説

をするようなツア
ーもつくつていき
たいと思えます。

これで、第一六
五回江戸東京拡大
フォーラム「よみ
がえれ江戸遺跡、
都市遺構の保存と
活用に向けて」
を閉会とします。
ご参加、ありがと
うございました。

小林 克ノぼやし・かつ。東京都江戸東
京博物館学芸員。一九五九年生まれ。日本
大学史学科卒業/日本大学大学院史学専攻
修士課程修了。著書に「甕の江戸」、「統美
術館・博物館は「いま」へ(日外教養選書)(共
著)、「掘り出された都市―江戸・長崎・アム
ステルダム・ロンドン・ニューヨーク企画
展」(「あかりの今昔―光と人の江戸東京史」
「読書案内 大江戸を知る本」(監修)、「掘
り出された都市・日蘭出土資料の比較から」
(共著)、「特別展 都市の記憶と再生―東京
のたてものをまもる―」(展示図録)、「近世
考古学・再生と活用」、「真砂遺跡」(発掘調
査報告書)、「今戸焼」(調査報告)がある。
近世考古学から出発し、江戸・東京の物質
文化、生活文化の実態について研究してい
る。江戸東京たてもの園で、一九九八年に
特別展「都市の記憶と再生」を手がけ、建
物の保存・活用だけでなく、都市の中の
考古資料の活用についても関心をもち、提
言する。



話題一覧

() 内の所属は話題提供時のもの、☆印は地域見学会も実施

1986年

- 第1回 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供・小木 新造 (歴史民俗博物館)
 第2回 都市下層社会の形成と変容……………内田 雄造 (東洋大学)
 第3回 やわらかい都市構造……………陣内 秀信 (法政大学)
 第4回 考現学の考古学……………佐藤 健二 (法政大学)
 第5回 明治期の道路 (街区)・路地の幅員基準について・石田 頼房 (東京都立大学)

1987年

- 第6回 博覧会と盛り場の明治……………吉見 俊哉 (東京大学)
 第7回 明治期の繁華街の建築……………初田 亨 (工学院大学)
 第8回 東京の土地・住宅史……………長谷川徳之輔 (建設経済研究所)
 第9回 江戸の構成と構造……………加藤 貴 (北区教育委員会)
 第10回 水の都・深川成立史……………吉原 健一郎 (成城大学)
 第11回 江戸の建築技術……………西 和夫 (神奈川大学)
 第12回 松浦武四郎の一疊敷の書齋……………ヘンリー スミス (コロンビア大学)
 第13回 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京……………井上 勲 (学習院大学)
 第14回 路上から見た江戸・東京……………藤森 照信 (東京大学)
 第15回 東京書物探索入門……………大串 夏身 (都立中央図書館)
 第16回 神田のサウンド・スケープの研究……………鳥越 けい子 (法政大学)

1988年

- 第17回 絵画史料にみる江戸の町……………波多野 純 (日本工業大学)
 第18回 明治期東京の飲料水販売……………松平 康夫 (東京都公文書館)
 第19回 江戸城御殿の室内空間について……………西 和夫 (神奈川大学)
 一障壁画下絵による復原一
 第20回 小江戸・川越のまちとすまい……………内田 雄造 (東洋大学)
 第21回 現代東京の祝祭……………松平 誠 (立教大学)
 第22回 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの 職と住
 ………………岡本 哲志 (岡本都市建築研究所)
 第23回 浅草寺の境内・門前世界……………竹内 誠 (東京学芸大学)
 第24回 都心定住を考える……………奥田 道大 (立教大学)
 一市街地の「町」の現代的意味一
 第25回 都市社会調査の歴史から……………佐藤 健二 (法政大学)
 第26回 世界都市東京の光と影……………町村 敬志 (筑波大学)

1989年

- 第27回 都市の語り出す物語……………宮田 登 (筑波大学)
 第28回 江戸の都市計画一江戸前島を中心として一……………鈴木 理生 (区立京橋図書館)
 第29回 江戸の武家屋敷について……………北原 糸子
 第30回 江戸の被差別・東京の被差別……………大串 夏身 (都立中央図書館)
 一もうひとつの江戸・東京一
 第31回 江戸東京の遊び一かるたを中心に一……………村井 省三 (村井かるた館)
 第32回 森 鷗外の都市論……………石田 頼房 (東京都立大学)
 第33回 東京都心部における空間利用形態……………山下 宗利 (筑波大学)
 第34回 「響き」としての東京の街なみ……………鳥越 けい子 (サウンドスケープデザイン)
 一神田地区における建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に一
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題……………奥田 道大 (立教大学)

1990年

- 第36回 鶴屋南北の幽霊……………横山 泰子 (国際基督教大学)
 第37回 東京と近代詩……………行吉 正一 (江戸東京博物館)
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる
 —マンションの老朽化と建て替え問題—……………内田 雄造 (東洋大学)
 第39回 東京の地価……………前田 尚美 (東洋大学)
 第40回 江戸の地価……………伊藤 好一 (関東近代史研究家)
 第41回 江戸のごみ処理……………伊藤 好一 (関東近代史研究家)
 第42回 都市農業と土地問題……………石田 頼房 (東京都立大学)
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京……………吉見 俊哉 (東大新聞研究所)
 第44回 江戸の名所・王子……………加藤 貴 (北区教育委員会)
 第45回 上水からみた江戸の都市計画……………波多野 純 (日本工業大学)
 第46回 江戸名所絵における遠近法……………ヘンリー スミス (コロンビア大学)

1991年

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗……………丸山 伸彦 (歴史民俗博物館)
 第48回 鋏形蕙斎の江戸一目図屏風……………小澤 弘 (調布学園女子短大)
 第49回 見立絵というもの……………鈴木 重三
 第50回 江戸住宅事情……………片倉 比佐子 (東京都公文書館)
 第51回 江戸・明治・大正のすまい……………平井 聖 (昭和女子大学)
 第52回 最近の自治体住宅政策について……………林 泰義 (計画技術研究所)
 第53回 東京市営住宅事業について……………内田 青蔵 (東工大附属高校)
 第54回 東京における水際土地利用の変容……………岡本 哲志 (岡本都市建築研究所)
 —日本橋川と隅田川を中心として—
 第55回 江戸から東京への景観構造変化……………窪田 陽一 (埼玉大学)
 第56回 東京都の都市計画と河川運河……………昌子 住江 (関東学院大学)
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい……………内田 雄造 (東洋大学)

1992年

- 第58回 新宿ヤミ市の復原……………松平 誠 (立教大学)
 第59回 鋏形蕙斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」をめぐる
 ………………小澤 弘 (調布学園女子短大)
 第60回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる—……………小木 新造 (江戸東京歴史財団)
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動……………鈴木 栄一 (千代田区議員)
 第62回 近代演劇人による伝統の発見……………横山 泰子 (国際基督教大学)
 第63回 博覧都市江戸東京……………吉見 俊哉 (東大新聞研究所)
 第64回 読売から新聞まで……………GERALD GROEMER
 第65回 音の風景と近代の忘れもの……………鳥越 けい子 (サウンドスケープ機構)
 —大分県竹田市瀧廉太郎庭園整備計画をめぐる—
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活……………初田 亨 (工学院大学)
 第67回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人—……………陣内 秀信 (法政大学)
 第68回 都市のまつり……………宮田 登 (筑波大学)

1993年

- 第69回 江戸、初期の土地問題……………吉原 健一郎 (成城大文学)
 第70回 江戸勤番武士の生活……………竹内 誠 (東京学芸大学)
 第71回 江戸のおんな……………杉浦 日向子 (江戸風俗研究家)
 第72回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合—……………加藤 仁美 (跡見学園短大)
 第73回 新説・日本近代住宅史……………藤森 照信 (東京大学生研)
 第74回 幻の東京オリンピックと万博……………磯村 英一 (東京都立大学)
 第75回 東京市社会局と都市社会調査……………佐藤 健二 (法政大学)

- 第76回 近代における東京の都市庶民住居の発展……江 面 嗣 人 (文化庁文化財)
 第77回 江戸の町と京都の町……小 川 保 (清水建設㈱技研)
 第78回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐる—伊 藤 毅 (東京大学)
 第79回 谷中墓地をめぐる……森 まゆみ (谷根千工房)

1994年

- 第80回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地—…八木澤 壮一 (東京電機大学)
 第81回 葬式のフォークロア……宮 田 登 (筑波大学)
 第82回 東京—極集中と今後の課題……東 郷 尚 武 (東京市政調査会)
 —より豊かな都市空間をめざして—
 第83回 東京都政の50年……大 串 夏 身 (昭和女子大短大)
 第84回 博物館の住宅展示を考えて……ジョージン カト
 —人々は生活史をどうみるか—
 第85回 都市空間とセクシュアリティ……上 野 千鶴子 (東京大学)
 第86回 メディアとしての絵はがき……佐 藤 健 二 (法政大学)
 第87回 メキシコシティと東京の間で……吉 見 俊 哉 (東大社会情報研)
 第88回 北京と東京の比較都市論……陣 内 秀 信 (法政大学)
 —歴史的空間構造と近代化のメカニズム—
 第89回 川越のまちなみの復元……内 田 雄 造 (東洋大学)
 浅 井 賢 治 (東洋大学)
 第90回 河鍋暁斎と江戸東京……小 木 新 造 (江戸東京歴史財団)

1995年

- 第91回 都市と美術館と絵画……小 澤 弘 (調布学園女子短大)
 —パリ・ロンドンと日本—
 第92回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺……丸 山 伸 彦 (歴史民俗博物館)
 第93回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料……天 野 隆 子
 第94回 歌謡曲のなかの東京……大 串 夏 身 (昭和女子大短大)
 第95回 江戸の着物文化……田 中 優 子 (法政大学)
 第96回 江戸東京学への招待試論……小 木 新 造 (江戸東京博物館)
 第97回 「境内」からみた三都……伊 藤 毅 (東京大学)
 —三都の比較都市史序説—
 第98回 盛り場考……神 崎 宣 武
 第99回 近世都市空間の創出過程について……北 原 糸 子
 —都市構築の基盤材調達の視点から—
 第100回 江戸東京学への招待……小 木 新 造 (江戸東京博物館)
 —生活の舞台としての都市空間— 陣 内 秀 信 (法政大学)
 高 階 秀 爾 (国立西洋美術館)
 田 中 優 子 (法政大学)
 司会: 内 田 雄 造 (東洋大学)
 第101回 都市の民俗学—色・音・匂の変化—……小 林 忠 雄 (歴史民俗博物館)

1996年

- 第102回 同潤会柳島アパートの生活……大 月 敏 雄 (東京大学)
 第103回 同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について
 ……佐 藤 滋 (早稲田大学)

- 第104回 住文化の体験の場としての博物館……………小澤 紀美子 (東京学芸大学)
 第105回 縁切寺―東慶寺と満徳寺……………高木 侃 (関東短期大学)
 第106回 考古学からみた江戸と他都市との比較……………小林 克 (歴史文化財団)
 第107回 日本パノラマ館と凌雲閣……………平井 聖 (昭和女子大学)
 ―浅草の2つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか―
 第108回 震災復興<大銀座>の街並みから……………石川 幸恵 (清水建設㈱)
 第109回 明治初年の大火と貧富分離論……………石田 頼房 (工学院大学)
 第110回 戦災復興計画の理念とその遺産……………越沢 明 (長岡造形大学)
 ―東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって―
 第111回 関東大震災後の東京の住宅地形成について……………藤岡 洋保 (東京工業大学)
 第112回 カフェーと喫茶店……………初田 亨 (工学院大学)

1997年

- 第113回 橋のアーバン・デザイン……………伊東 孝 (日本大学)
 第114回 城下町大坂、江戸の都市設計……………篠原 修 (東京大学)
 第115回 東京都都市景観マスタープラン……………布施 六郎 (東京都)
 ―新たな景観まちづくりへの展開―
 第116回 江戸・東京の湯屋……………松平 誠 (女子栄養大学)
 第117回 江戸城から宮城へ……………米田 雅子
 ―皇居を中心とする都市空間の変容―
 第118回 江戸藩邸物語……………加藤 貴
 第119回 建築家、佐藤功一と都市への視線……………米山 勇 (江戸東京博物館)
 第120回 明治の歌謡にみる東京……………大串 夏身 (昭和女子大短大)
 第121回 「江戸名所図会」と長谷川雪旦……………鈴木 章生 (江戸東京博物館)
 第122回 町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水……………波多野 純 (日本工業大学)
 ―絵図・図面にみる江戸の都市施設―
 第123回 参勤交代―巨大都市江戸のなりたち―……………原 史彦 (江戸東京博物館)

1998年

- 第124回 寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化……………棚木 真 (新宿歴史博物館)
 第125回 関東・東国の部落史……………藤沢 靖介 (部落解放研究所)
 一部落史の「見直し」論議に引きつけて―
 第126回 明治期の被差別部落……………友常 勉 (部落解放研究所)
 ―都市東京と植民地主義の言説編制から―
 第127回 関東大震災と朝鮮人虐殺事件……………石田 貞 (埼玉同和教育協)
 第128回 原宿の空間構造―人気の秘密を歴史から読む―……………柳瀬 有志 (法政大学)
 第129回 横浜市の市営住宅事業について……………水沼 淑子 (関東学院女子短大)
 第130回 目白文化村とその変貌……………八木澤 壮一 (東京電機大学)
 第131回 地域学の明日を考える……………小木 新造 (江戸東京博物館)
 橋爪 紳也 (京都精華大学)
 結城 登美雄 (まちづくりプランナー)
 森 まゆみ (作家・「谷根千」主宰)
 司会:陣内 秀信 (法政大学)
 第132回 江戸歌舞伎の特色……………服部 幸雄 (日本女子大学)

1999年

- 第133回 東京・明治大正の人口問題……………小木 新造 (江戸東京博物館)
 第134回 江戸東京フォーラムと住総研……………大坪 昭 (住宅総合研究財団)
 墨壺(伝統的な)の履歴書……………吉田 良太 (住宅総合研究財団)
 第135回 「ふるさと」としての東京深川……………川田 順造 (広島市立大学)
 ―ある個人的な感想―
 第136回 都市と農村の蜜月時代……………江波戸 昭 (明治大学)
 ―近郊農業の展開と流通の変化―
 第137回 永井荷風と東京……………湯川 説子 (江戸東京博物館)

- 第138回 地域雑誌からみた町……………立壁 正子 (「ここは牛込、神楽坂」)
 野口 由紀子 (「武蔵野から」)
 大野 順子 (「まち雑誌 千住」)
 司会:森 まゆみ (作家・「谷根千」主宰)

2000年

- 第139回 「ニュースの誕生」展と江戸東京学……………木下 直之 (東大総合研究博物館)
 北原 糸子 (東大社会情報研究所)
 佐藤 健二 (東京大学)
 吉見 俊哉 (東大社会情報研究所)
 富澤 達三 (神大常民文化研究所)
- 第140回 長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」……西 和夫 (神奈川大学)
 千野 香織 (学習院大学)
 波多野 純 (日本工業大学)
- 第141回☆大久保にみる都市の国際化……………稲 葉 佳子 (㈱ゾ・オ・プランニング)
- 第142回☆神田多町……………小藤田 正夫 (千代田区まちづく公社)
 ー震災復興の「まち」から見えるものー
- 第143回 築地・横浜の外国人コミュニティ……………森 田 朋子 (お茶の水女子大学)
- 第144回 江戸東京フォーラムの果たした役割……………太 田 博太郎 (日本学士院)
 小 木 新 造 (江戸東京博物館)
 陣 内 秀 信 (法政大学)
- 第145回 遺跡から江戸の生活文化を探る……………波多野 純 (日本工業大学)
 ー江戸考古学最新情報ー
 後 藤 宏 樹 (千代田区四番町資料館)
 棚 木 真 (新宿歴史博物館)
 司会:小 林 克 (江戸東京博物館)

2001年

- 第146回 江戸の見世物……………川 添 裕 (見世物文化研究所)
- 第147回☆千住の町おこしと地域博物館の取り組み……………所 理喜夫 (足立区立郷土博物館)
 荒 居 康 明 (町並み研究家)
 波多野 純 (日本工業大学)
 大 野 順 子 (町雑誌「千住」)
- 第148回 祭礼からみた都市空間の変容と地域コミュニティの形成
 ー神田祭りを主な素材としてー……………伊 藤 裕 久 (東京理科大学)
- 第149回 江戸の女性と布橋灌頂会ー立山博物館の試みー…鳥 越 けい子 (聖心女子大学)
 米 原 寛 (立山博物館)
- 第150回 都心居住の再考……………波多野 純 (日本工業大学)
 ー江戸東京の生活史・文化史の視点からー
 初 田 亨 (工学院大学)
 大 月 敏 雄 (東京理科大学)
 森 まゆみ (作家・「谷根千」主宰)
 東 孝 光 (建築家・千葉工大)
 司会:陣 内 秀 信 (法政大学)

2002年

- 第151回 モダン都市・東京の読書空間……………永 嶺 重 敏 (東大資料編纂所)
 ー読書装置の1920~30年代ー……………佐 藤 健 二 (東京大学)
- 第152回 近代皇族邸宅にみる和風と洋風……………水 沼 淑 子 (関東学院大学)
 小 沢 朝 江 (東海大学)
- 第153回 江戸と怪談と怪異空間……………内 田 忠 賢 (お茶の水女子大学)
 司会+コメンテーター:横 山 泰 子 (法政大学)
- 第154回☆向島の成立と下町気質……………佐 原 滋 元 (向島百花園茶亭さばら)

- 第155回 関一と近代大阪の再創造……………ジェフリー・ヘインズ (オレゴン大学)
 コメンテータ:石田 頼 房 (東京都立大学)
 // 内田 雄 造 (東洋大学)
 通訳:ビュスト (東京大学)

2003年

- 第156回 大江戸八百八町と日本橋界限……………コメンテータ:波多野 純 (日本工業大学)
 - 『熙代勝覧』の世界 - // 森 まゆみ (作家・「谷根千」主宰)
 // 竹内 誠 (江戸東京博物館)
 // 市川 寛 明 (江戸東京博物館)
 コーディネータ:小澤 弘 (江戸東京博物館)
 第157回 もう一つの東京の近代住宅史:私論……………山口 廣 (日本大学)
 第158回 江戸のモノづくり……………基調講演:全 相 運 (韓国科学技術翰林院)
 - 文化と技術のクロスオーバー - コメンテータ:川田 順 造 (神奈川大学)
 // 高田 誠 二 (北海道大学)
 // 中村 士 (国立天文台)
 // 橋本 毅 彦 (東京大学)
 // 波多野 純 (日本工業大学)
 // 渡 邊 晶 (竹中大工道具館)
 コーディネータ:小澤 弘 (江戸東京博物館)
 // 鈴木 一 義 (国立科学博物館)
 第159回☆日本近代の集合住宅の原点としての「下宿屋」……………堀 江 亨 (日本大学)
 松山 薫 (東北公益文科大学)
 高橋 幹 夫 (文化誌研究家)
 第160回 幻燈から映画へー転換期の映像メディアー……………岩本 憲 児 (早稲田大学)
 第161回 都市への記憶:「満州国」建築へのまなざし……………古賀 由起子 (コロンビア大学)
 コメンテータ:西澤 泰 彦 (名古屋大学)

2004年

- 第162回 音楽の世界における〈邦楽と洋楽〉……………秋山 宏 (日本大学)
 第163回 江戸東京に於けるスラムの発生と変容……………内田 雄 造 (東洋大学)
 コメンテータ:加藤 貴 (早稲田大学)
 第164回☆銀座の歴史と都市文化を考える……………岡本 哲 志 (岡本都市建築研究所)
 第165回 よみがえれ江戸遺跡……………基調報告:谷川 章 雄 (早稲田大学)
 - 都市遺構の保存と活用に向けて - // 波多野 純 (日本工業大学)
 事例報告:後藤 宏 樹 (千代田区四番町資料館)
 // 佐藤 攻 (東京都埋蔵文化財センター)
 // 松尾 信 裕 (大阪市文化財協会)
 // 扇 浦 正義 (長崎県都市整備推進課)
 司会:小林 克 (江戸東京博物館)

2005年

開催案内

フォーラムは、江戸東京フォーラム委員会で企画を検討し、年5回開催しています。
開催案内は、インターネットの当財団ホームページでご覧になれます。

URL:<http://www.jusoken.or.jp/edotokyo.htm>

発刊物など

(1) 研究論文・報告

- ① 「江戸東京、生活空間の研究」、研究所報No. 14号、A4版19ページ、
住宅総合研究財団、1988
- ② 「江戸東京フォーラム委員会活動」(1)～(7)、研究年報No. 18～24、
A4版51ページ、住宅総合研究財団、1992～1998

(2) 一般書籍

- ① 「江戸東京を読む」、A5版295ページ、筑摩書房、1991
- ② 「江戸東京学への招待(1)文化誌篇」、B6版290ページ、日本放送出版協会、1995
- ③ 「江戸東京学への招待(2)都市誌篇」、B6版282ページ、日本放送出版協会、1995
- ④ 「江戸東京学への招待(3)生活誌篇」、B6版273ページ、日本放送出版協会、1996

(3) 記録小冊子

- ① 「地域学の明日を考える」、B5版59ページ、住宅総合研究財団、1999
- ② 「地域雑誌からみた町」、B5版27ページ、住宅総合研究財団、2000
- ③ 「遺跡から江戸の生活文化を探るー江戸考古学最新情報ー」、B5版27ページ、
住宅総合研究財団、2001
- ④ 「都心居住の再考ー江戸東京の生活史・文化史の視点からー」、B5版44ページ、
住宅総合研究財団、2002
- ⑤ 「江戸のモノづくりー文化と技術のクロスオーバーー」、B5版55ページ、カラー、
文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり」総括班／住宅総合
研究財団／国立科学博物館／東京都江戸東京博物館

(4) 住宅総合研究財団機関誌「すまいろん」の住総研ニューズレターページ

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは 1986 年 5 月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7 月に第 1 回のフォーラムを開催しました。翌年度から、当財団の活動として、現在に至っています。

フォーラムは委員会で企画がつけられます。委員会の構成メンバーは下記の通りです。

主な参加メンバーは、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学・文学・美術史・地域学・地理学等の研究者ですが、関心ある方は、どなたでも参加することができ、自由に活発な議論や意見交換が行われます。各分野での先端的な問題意識も示され、お互いの刺激と示唆を与えあう場です。

フォーラムの目的は、一言で言えば、東京を再考することです。東京は、政治、経済、情報、文化が一極集中しています。都市機能が雑然と混ざり合って、極めて輻輳した多重構造都市とも言えます。この東京を解明する方法は、江戸から今日までの一貫した視座でとらえること、都市研究に必要なあらゆる学問分野の専門家が、同じフロアで情報や意見交換をして、共通の研究基盤を持つこと、すなわち、学際的に展開をすることです。このような立場で、江戸東京の文化の変容、都市形成、日常生活などを再考します。

2000 年度から、フォーラムを企画するにあたり、企画の基本柱をつくっています。

その基本柱は、次の 4 つです。

- ①「記憶」としての都市
- ②「地域研究」の掘り下げ
- ③文化学・都市文化学で「1920～30年代を生きる」
- ④情報網の構築を江戸明治に学ぶ

21 世紀は「都市の時代」だと言われています。全世界の人口の大半が都市や都市化社会の中で生活を営むようになっていわれています。そのような時代を迎え、江戸東京フォーラムでは、引き続き東京を舞台に総合的な都市研究に取り組む所存です。

フォーラム委員会

委員長

小木新造 (財)東京都歴史文化財団顧問

委員

小澤 弘 東京都江戸東京博物館教授

陣内秀信 法政大学工学部建築学科教授

波多野純 日本工業大学工学部建築学科教授

森まゆみ 作家/地域雑誌「谷根千」発行人

横山泰子 法政大学工学部一般教育担当助教授

吉見俊哉 東京大学大学院情報学環教授

(50 音順)

「よみがえれ江戸遺跡

—都市遺構の保存と活用に向けて—

2005 年 3 月 31 日 発行 ©

編集＝江戸東京フォーラム委員会

発行人＝峰政克義

発行＝財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋四丁目 29 番 8 号

Tel. 03-3484-5381 Fax. 03-3484-5794

E-mail: suzuki@jusoken.or.jp

URL: <http://www.jusoken.or.jp/>

印刷所＝株式会社 七映

住宅総合研究財団について

当財団は、1948(昭和 23)年、戦後の著しい住宅不足が重大な社会問題となっていた時期に、東京都の許可を得て設立された公益法人である。

当時の清水建設社長・清水康雄氏の私財の一部を基金とし、住宅の総合研究と、その成果の公開・実践・普及を目的としている。

住生活の向上に貢献しうる研究の委託や助成、シンポジウムやフォーラムの開催、機関誌「すまいるん」の発行、「住」に関する専門図書館の公開など、学問と実践をつなぐ研究の場の提供やその普及活動を行っている。